
僕らの冒険をめぐる物語

かかし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの冒険をめぐる物語

【著者名】

かかし

N4170N

【あらすじ】

僕ら三人は、三年生のとき親友になつた。いつだつて一緒に六年生になつて、ケイヤとは別のクラスになつてしまつた。よっちは引越しして、学校も変わつてしまつた。だけど、僕らの友情は変わらない。

そう信じていた。

引越ししたよっちは一通のメールがきた。それから、僕らの冒険が始まった。

朝、ケイヤが躊躇いもなく教室に入ってきた。僕の席まで来ると、口を尖らせながら言つ。

「なあ、翔。昨日、よっちゃんからメールがきたんだ」
ケイヤが携帯電話の画面を見せる。僕は携帯を持っていない。だから、よっちゃんからのメールは全てケイヤの携帯にくる。当たり前のことなんだけど、なんか面白くない。

『この『』は、イライラして、苦しくて、疲れて、本当に嫌になる』画面にはこう書かれていた。

「これだけ?」

「いや、俺ビックリして、『どうしたんだ?』って返信したんだ。

それで、帰ってきたのがこれ

『ゴメン、なんでもないちょっと愚痴りたくなつただけ』

僕とケイヤは目を合わせた。

よっちゃんが愚痴りたくなるなんて、これは大変なことだ!

僕らは、小学三年生のときに同じクラスになつた。六年生になつて、ケイヤとは別のクラスになつてしまつた。よっちゃんは、引越しして学校も変わってしまった。

だけど、僕らの友情は変わらない。三人の友情はいつまでも続くんだ。

そう僕は信じていた。

三年生になつた最初の席決めで、僕は窓側の一番つじうの席になつた。僕の前の席がケイヤで、その前がよっちゃんだ。

ケイヤは授業中、よっちゃんの背中に消しゴムをぶつけたり、鉛筆

のうしろでわきの下をくすぐつたり、いろんなちよつかいを出していた。よっちはんはその頃からぼつちやりしていて、触つたら気持ちよさそうで、ケイヤの気持ちも分からぬでもない。

よっちはんは人がいい。そんなことをされたからって、絶対怒つたりはしない。ときどき振り返つて、「やめてよ」って言つべらり。ケイヤはそのタイミングを狙つてゐる。よっちはんが振り返ろうすると、そこに人差し指を立てて待つてゐる。よっちはんのふつくらとした、いかにも触つたら気持ちよさそうな頬に、ケイヤの人差し指が刺さつていく。

僕は真剣によっちはんに同情した。

ケイヤはそれに飽きたると、うしろを振り返つて僕に話しかけてくる。話は面白いんだけど、いい加減で嘘も多い。そのことで僕とケイヤは喧嘩になつたんだけど、その話は後です。ケイヤは話し出すと止まらない。うしろを向いたまま話し続ける。

三年生のときの担任は森田先生。通称、ゴリ田。この学校の教師の中第一位、二位を争う凶暴な奴だ。必死に目配せして危機を知らせようとするとんだけ、ケイヤはお構いなしで話し続ける。無視しようが、ハッキリともう喋るなど言あつが、話し続ける。そのうちチョークが飛んでくる。なぜだか、ケイヤはうしろを向いたまま、スッとかわす。チョークは僕の額を直撃する。

そう、ケイヤはけつこう、うざつたい奴だつたんだ。

三年生の一学期の中ごろの話だ。僕らは同じ掃除の班だった。

放課後、掃除の後に三人でモップを振り上げる。僕はちりとりで防御はとつくに帰つてしまつてゐる。

よっちはんはすでに箒で切られて、机の上に仰向きに倒れでいる。

ケイヤが机に飛び乗り、モップを振り上げる。僕はちりとりで防御の姿勢をとつた。天井で何かが爆発した。白い粉と破片がすごい勢いで降つてくる。振り上げたモップで蛍光灯を壊してしまつたんだ。ケイヤの頭が白髪みたいになつた。多分、僕の頭も。

目撃者はいない。

黒板の上にかけられた時計の音が、こんなに響くんだけ初めて気が付いた。校庭でサッカーをする上級生の声が聞こえる。三人の目が同時に合った。そして、心が通じた。

よつちんは掃除器具の入ったロッカーまで行くと、中から雑巾を一枚取り出し、戻つてくる。

「念のため、指紋は拭き取つておいたほうがいいよ」
よつちんは言った。

僕らは、慌ててモップと箒の柄を拭き、頭の粉を振り払いながら下駄箱へ走つた。

次の日、ホームルームでそのことが問題になつた。ゴリ田が「全員目をつぶつて、やつた奴手を上げなさい」って、テレビのワンシーンみたいで感動した。薄田で見てたけど、もちろん手を上げる奴なんかいない。

これで終わるのかと思つたら、人生はそんな甘いもんじゃなかつた。授業の後、僕ら三人は職員室に呼び出された。誰かが僕らが残つていたことを言いつけたらしい。

「見てた奴がいるんだ、今のうちに誰がやつたか言いなさい！」

職員室に入ったとたん、室中に響き渡る声で怒鳴られた。他の先生たちが一斉に視線を向ける。一・二年のとき担任だつた恵子先生も、困つたような顔で見ている。恥ずかしい。ケイヤもよつちんも下を向いたまま動かない。

「見てた人がいるなら、その人に聞けばいいじゃないか！」

これはまずい。何がまずいって、一番まずいのは言つたのが僕だつてこと。悪い癖が出てしまつた。頭で考えたことが、つい口に出てしまつ。

「ゴリ田は顔を真つ赤にして怒りに震えている。マンガみたいに、耳とか頭のてつぺんから蒸気が噴出しそうだ。想像してたら、笑いそうになつた。危ない危ない。ここで笑つたら一巻の終わりだ。その後、僕らは一人ずつ、職員室の奥の部屋へ連れて行かれる。八畳くらいの広さで、テーブルを挟んで一人がけのソファーが対面して置かれている。面談や来客のときに使う部屋なんだけど、ほぼ取調室。

まず僕が呼ばれた。一人きりになると、ゴリ田は思いのほか大きい。白状してしまおうかと思った。実際に壊したのはケイヤなんだ。ただ、それだとなんか負けたつて気がする。負けるのは絶対に嫌だから、我慢した。頑張つて我慢した。言つておくけど、おしつこなんてチビッていない。

三人とも正直に話さないのなら、全員の保護者を明日呼び出しだつて、ゴリ田が言い始めた。そういうことは初めから言つて欲しい。今更じや、引っ込みがつかない。

次はよつちん。気の弱そうなよつちんには、とても耐えられないだろうと思った。だいたい、よつちんは机の上で死んでたんだから、ほとんどかかわつていない。巻き添えを食つただけだ。よつちんが話してしまえば、僕が嘘を言つたこともばれる。仕方のないことだ、責められない。覚悟を決めた。

しかし、十分くらいして、よつちんは平氣そうな顔で、ニヤニヤしながら出てくる。ゴリ田に見えないよつちん、胸の前でこぶしに親指を突き立てている。

よつちんは只者でない。僕はそのとき、初めてそのことに気が付いた。

最後にケイヤが呼ばれた。「ゴリ田も疲れた顔をしている。ケイヤが部屋に入つて五分くらいすると、ゴリ田が一人で出てきた。お前ら帰つていないと言つ。ケイヤからはもう少し話を聞くから、先に帰れと。

僕とよつちんは顔を見合せた。状況がよく飲み込めないが、仕方なく帰ることにした。

「明日、親を呼び出しだって？」

僕は校門を出るときに、よつちんに言つた。親に、なんて説明しようかと、暗い気分だった。

「うん。言われたけど、脅しで言つてるだけだから、大丈夫だよ」「何でそんなこと分かるんだよ？」

「だつて、証拠もないのに親を呼び出しして、もし間違つてたら、問題になるじゃない。そんなバカなことしないと思つよ」「…………

次の日、ケイヤは一時間田のチャイムが鳴るのと同時に、教室に入ってきた。

「どうした?」僕が聞くと、

「喋っちゃつた、『ゴメン』と、顔の前で両手のひらを合わせて、頭をぴょこんと下げる。

うしろを振り返つていたよつちんは、明らかに気が抜けたような顔をしている。

「何で?」僕が言つたと同時に、「起立」田直が号令をかけた。ゴリ田が来たのだ。僕らの会話は中断された。

ケイヤは大人しく授業を聞いている。

ケイヤの背中を見ていたら、殴りたくなってきた。僕とよつちんがあれだけ怖い思いをして黙つてたのに、当の本人がばらしちゃうつて、どういうことだ! もしかすると、嘘つきのケイヤのことだ、あることないと言つて、自分が責め逃れしたのかもしれない。

何で昨日は、こんな奴のことをばつたりしたんだろう。すべに言つちやえよかつたんだ！

僕は憤然としながら授業が終わるのを待つた。田の前の背中を五回包丁で刺して、ロープでグルグル巻きにして、三回火あぶりにした。四回田の火あぶりの準備をしているときこそ、やつと終業のチャイムが鳴つた。

田直の号令が終わると同時に、僕はケイヤを問い合わせようとして立上がる。そのとき、まだ教室に残っていたゴリ田が僕とよつちんの名前を読んだ。職員室に来いと。

わつ、最悪だ！

僕とよつちんはゴリ田の後について、職員室に向かつ。

「辻田くん、どうして話しかつたんだうね？」

よつちんがあんまりのんびりというものだから、余計に腹が立つてくる。辻田はケイヤの苗字だ。

「知るか！あの裏切り者が！何であいつのために僕らが怒られなくちやいけないんだ！」

「でも、どうしたんだろう」

「絶対ぶつ殺してやる」

職員室に入ると、昨日の個室と一緒に通された。ゴリ田は奥のソファーに座ると、僕らを手前のソファーに座らせる。

「お前ら、辻田にいじめられてるのか？」

怒られるどばかり思つていた僕は、予想外の質問にビックリした。

「蛍光灯のこと、辻田に無理やり口止めされたのか？」

「辻田くんがそういうたんですか？」

よつちんはゆつくりとした口調で言つ。

「じゃあ、辻田は蛍光灯をどうして割つたんだ？」

「辻田はなんていつてるんですか？」

僕は話の流れが、上手くつかめなかつた。

「イライラしたから、腹立ち紛れに蛍光灯をぶつ壊したつて言つてたぞ」

「一人で壊したつて？」

「違うのか？ それを見られて、誰かに言つたら殴るぞつて、辻田はお前らを脅したんじやないのか？」

「違います！」「

僕とよつちんは声をそろえて言つた。

結局、ケイヤは辻田の策にまんまと嵌つてしまつて、僕らの親が呼び出されなつよつて、自分ひとりで罪を被るうとしたんだ。

あんなハッタリに騙されるなんて 、ケイヤはおめでたい奴だつた！

以来、僕らは親友になつた。川に石を投げで、誰が一番石を跳ねさせることができるか競つたり、ヤゴを捕まえたり、川に落ちて溺れかけるよつちんを助けたりした。林の中を探検したり、蝉を捕まえたり、木登りして下りられなたよつちんを、どうにかこうにか、やつとのことで下ろしたりした。

どんなときでも、蜂に刺されたり、転んで前歯を折つたときでさえ、よつちんは泣き言を言つたり、愚痴を言つたりしなかつた。ちよつと恥ずかしそうに、頭をかいてるだけだ。よつちんの口もとにはいつだつて微笑があつた。

四年生になつてすぐ、よつちんの両親が離婚した。よつちんとお母さんが今まで住んでたマンションに残つて、お父さんが出て行つた。原因は多分、お父さんの浮気。

そのときでも、よつちんは弱音を吐かなかつた。「ぼくは男だか

ら、お母さんを守つてあげなくちゃいけないんだ」なんて、一丁前なことまで言つていた。

だから、僕とケイヤは、よつちんが愚痴を言つなんてこと信じられなかつた。

僕はケイヤから携帯を奪い取り、何度もそのメールを読み返した。「何かあつたのかなあ？」

僕は、指で摘まむとブニュブニュして最高に気持ちいい、よつちんの頬つぺたを思い出しながら言つた。

「前のメールじゃ、まだ新しい学校に馴染めてないような感じだつたよな。まさか、いじめられてるんじゃないだろうなー」
ケイヤは今にも怒り出しそうだつた。

授業開始のチャイムが鳴った。ケイヤは渋々と教室を出て行く。担任が来て朝礼をした後、体育館へ移動するように言つ。そう、今日は一年のうちで最もエキサイティングでファンタスティックな日、一学期の終業式なのである。即ち、明日から夏休みなのだ。みんな廊下に出て、話しながら体育館へ向かう。誰もがいつもより口数が多い。

廊下でケイヤが追いついてきた。そして、少し興奮したように言つ。

「翔、どうするよ？」

「どうするつて、何をだよ？」

「よつちんと約束しただろ。困ったことがあつたら、いつでも助けて行くなつて」

「まさか？」

「決まつてるだろ！」

「でも、どうやつて？ よつちんの引っ越しした先つて、すこく遠いんだろ。高速道路に乗つて、車で三時間くらいかかるつて、よつちん言つてたぞ」

「昨日の夜、地図見たんだ。一日海まで出て、海沿いの道を走つて行つて、途中から山のほうに入るんだ。その山の峠を越えて、下りきつて、県庁のある市を通り過ぎて、しばらく行つたよつちんの家だ」

「ケイヤの家の人人が、連れて行つてくれのか？」

「うちの親はダメだ、今、開催中だから来週までカンヅメで出でこれない。じいちゃんはボケてるし。翔の家の人人は？」

「うちも父さんは仕事だし、最近忙しいみたいで、田曜日だつて会社に行つてゐる。絶対無理だよ」

「しょうがない。俺たちで行くしかないか」

「Jのときは、す「J」へ嫌な予感がした。できれば答えは知りたくないと思った。

「どうやって?」

「自転車だよ」

当たり前のようだ、ケイヤは言つた。

「さつき、簡単に言つたけど、Jから海に出るのだから、かなり遠いよ。自転車で行くなんて絶対無理だつて」

「距離はだいたい百五十キロくらい。さすがに、一日じゃ無理だから、俺の考えじゃ、Jを下った辺りで一泊すれば、次の日にはJちゃんの家まで行けると思う。でも、同じような感じで帰つてくれれば、一泊三日で大丈夫だよ」

「Jに泊まるんだよ?」

「夏だし、野宿でいいよ」

「無理、無理、無理! 絶対に無理!」

「行くつて約束したじゃないか!」

「でも、あのメールだけじゃ、本当にJちゃんが困つてるとか分からぬじやん。Jちゃんが来て欲しいって、言つてるわけでもないし……」

「Jちゃんの性格からして、来て欲しいと思つたって、そんなこと言つかるよ」

「まあ、そりや、やうだけ……」

「じゃあ、明日の朝、出発な」

「ちょっと、待つてよ。Jちゃんの親、そんなのダメだつて言つに決まつてるよ」

「何言つてるんだよー Jちゃんがどうなつてもいいのかよ」

「そんなことないけど……」

体育館に着いたので、僕らは一旦別れた。

終業式では校長先生が何か言つている。はげ頭が揺れてるだけで、何を言つていいのかまったく耳に入つてこない。晴れやかな気分で

舞い上がるクラスメートの中、僕の気持ちは上下左右に揺れ動いていた。

もちろん、よつちんのことは心配だ。それと、旅行に行くようなところまで、自転車で行く覚悟とはぜんぜん別の話だ。しかも、野宿だ。蛾とか、ゴキブリとか、山のまつならムカデとか、もつとすごい虫もいるかもしねー。

終業式が終わると、ケイヤが体育館の出口で待っていた。気付かない振りをしようと思った。が、目が合ってしまった。

「翔、いいこと思ついたぞ。今日から、俺ちに泊まれよ。三日間、集中して夏休みの宿題終わらせるとか言つてさあ。そうすれば、翔の母さんも文句ないだろ。もし、翔の母さんから電話があつたつて、うちの爺ちゃん、どうせ何言つてるかわかないから、ばれつこないつて」

ケイヤは、新しい法則を発見した物理学者みたいに、目をキラキラさせながら言った。

そのアイデアが、本当に有効かどうか、かなり疑わしかった。だけど、ケイヤは一度言い始めたら後には引かない。よつちんのことも心配だ。そして何より、よつちんに会いたい。抑えられていたよつちんに会いたいという気持ちが、一気に膨らんでくる。よつちんのあの柔らかい頬つべたをブニコブニコしたい。

ケイヤもよつちんのことが心配だといいながら、本当はよつちんに会いたいんだと思つ。

ここまできたら、覚悟を決めるしかない。こうなつたら、峠の向こうだらうが、北海道だらうが、ブラジルだらうが、火星だらうが、自転車で行つてやる。待つてろよ、よつちんー！ ほんの一瞬だけ、そんな気分になつた。

「ケイヤ！ よつちんに会いに行こー！」

言つたとたんに、後悔の念が押し寄せてくる。

頭に浮かんだことを、深く考えることもなく、口に出してしまつ。

僕はまったく成長していない……

家に帰ると、母さんにケイヤのところで、今夜から、夏休みの宿題の宿題をすることになったと告げた。自分で言つても、終業式の当日から、宿題をするなんて、あまりにも白々しい。現実的じゃない。ファンタジーだ。

だけど、母さんは意外にあつさり許してくれた。拍子抜けするくらいに。

ダメだつて言わないんだあ…… ここのくらいの嘘、見抜けよ！

はたして、僕らの自転車旅行は、実行可能となつた。

夕方になり、着替えをティパックに詰め、家を出た。物置から自転車を出しでいるときに、宿題を持つていなことに気付いて慌て取りに戻る。自転車は去年の誕生日に買つてもらったマウンテンバイクだ。

ケイヤの家は僕の家から自転車で五分くらいの場所にある。マンションの八階で、眺めがいい。二LDKの間取りで、窓に面した二十畳くらいのリビング・ダイニングがある。雨の日は、よつちんと三人で、よくその部屋でゲームをしていた。

ケイヤのお父さんは競輪の選手だ。けつこう有名な選手だつたらしい。最近は、落ち田らしいけど、現役で選手は続けている。部屋には、優勝したときの賞状とか、トロフィーとかが所狭しと飾られている。ユニフォームを着て自転車に乗つている写真やポスターも貼つてある。なかなかカッコいい。

選手は競輪が開催される前日から最終日まで、宿舎に缶詰にさせられる。電話も禁止されて、原則、連絡は取れなくなる。八百長を防止するためなんだそうだ。だから、ケイヤのお父さんはあまり家

にいることがない。

お母さんは、ケイヤが小学一年のときに病氣で亡くなつたらしい。ケイヤはそのことについては話したがらない。一度だけ、写真を見たことがある。とても綺麗な人だつた。「俺の目は、母さんの目とすごく似てるんだって」「写真を見ながら、ケイヤがつぶやいた。少しだけ嬉しそうだつた。ケイヤの目は、一重で、涼しげで、そしてちょっと色っぽい。クラスに、ケイヤのことが好きな女子が何人かいるつて話を聞いたことがある。誰なのか少し気になるんだけど、ケイヤはそんなのせんせんお構いなしだ。

だから、ケイヤはほとんど爺ちゃんと一緒に生活している。「俺が面倒見てやつてるんだ」とつてよく言つてゐる。ケイヤの爺ちゃんは耳が遠くて、ちょっとボケてる。

僕はマンションの自転車置き場に自転車を置くと、ケイヤの部屋へ向かつた。

「よし！ 逃げずにきたな！」

マンションのドアを開けると、ケイヤが嬉しそうに立つていた。

「逃げるもんか！」

「今、晩飯作つてゐるから、テレビでも見ててよ」

中に入ると、カレーのいい匂いがした。

家事一切は、ケイヤがやつてゐる。部屋はいつも綺麗に片付けらでいる。一日一回、洗濯もしていと言つていて、料理もお手の物だ。そういう意味では、僕はケイヤのことを尊敬している。

キッチンを覗くと、やけに大きな鍋で、カレーを作つてゐる。

「何でそんなにたくさん作つてるんだ？ 何人前あるんだよ、それ？」

「えーと、十四人前。俺たちが出かけた後、爺ちゃんが食うものな

くなるだろ。作り置きしておくんだ。一食分ずつ冷凍しておけば、爺ちゃん電子レンジくらい使えるからな

「三日間も、毎食カレーでいいの？」

「大丈夫だよ。前の食事が何だったかなんて、すぐに忘れるんだから

「ら

僕はリビングに向かう。大型の液晶テレビの前のソファーに爺ちゃんがぽつりと座っている。

「こんにちは」

挨拶すると、不思議そうな顔で僕のことを見る。耳が遠いから、聞こえているのかどうかも怪しい。何度もケイヤの爺ちゃんとは合てるんだけど、僕のことを分かるときもあるし、分からないときもある。ケイヤの父さんと間違えたり、爺ちゃんの小学校の同級生だったという幸一くんと間違えたりする。初めはビックリしたけれど、最近は慣れたもので、僕は適当にその役になつて返事をしている。

僕は爺ちゃんと並んでソファーに座った。前にも見たことのある、ドラマの再放送がテレビに流れていた。そのドラマが終わるころ、ケイヤがカレーライスをお盆に載せて持つてくる。ソファーの前のテーブルにカレーを置き、僕らはテレビを観ながら、三人並んでカレーを食べた。そのカレーは僕の母さんの作るものよりも、なぜか懐かしい味がした。

夕方の報道番組が始まった。政治家の汚職事件のニュースのあと、郵便局に強盗が入り、犯人がその職員を人質に取つて、車で逃亡したというニュースをやつていた。

犯人の顔写真がテレビに映し出されて、その顔がゴリ田に少し似ていたので、二人で大笑いした。僕らが笑うと、爺ちゃんもつられて笑い出だした。その笑い方がとつても楽しそうだったので僕らは嬉しくなつて、もつと笑つた。

カレー ライスを食べ終わると、僕の母さんから電話があった。爺ちゃんに換わったけど、ほとんど話は通じなかつたみたい。多分、よほどのことがなれば一度と電話はかかつてこないだろう。

僕はケイヤと並んで食器を洗い、爺ちゃんのために、一食分ずつカレーとご飯をジップつきの袋に分けて入れた。すべて冷凍庫に入れ、これでいいのか疑問だけど、とりあえず爺ちゃんの食料は確保された。

よつちんに明後日に行くことを知らせようかと思った。ケイヤが突然行つてビックリさせてやううと言つた。確かにそのほうが面白そうだ。メールで、あさつて予定がないかだけを聞いた。

少しだけゲームをして、明日は早いのだからということで、信じられないくらいの時間に布団に入った。興奮していたのか、時間が早すぎせいか、なかなか寝付くことができなかつた。

夜明けとともに出発するつもりでいた。

残念なことに、田が覚めたとき、田は昇りきっていた。三人前のカレーを電子レンジで温め、爺ちゃんと三人で食べた。ケイヤは、よつちんの所へ行くから一日間帰つてこないこと、食事は冷凍庫の中に用意してあることを爺ちゃんの耳元で、かなり大きな声で言った。爺ちゃんは壁の向こうの世界を眺めている。なんとなく、うなずいたようにも見えた。

「人間つて何も喰わなくたつて、一・二・三日なら死はないよな……」
ケイヤは自分に言い聞かせるように言った。

僕はデイパックに荷物を入れながら、聞こえなかつたことにする。

天気はいかにも夏休みらしい晴天で、大きな入道雲が二つ、東の空に浮かんでいた。油蝉が喧しく鳴き始める。夏の太陽が、朝の清涼を蒸発させ、その粒子がキラキラと輝いている。

僕らはマンションの前で、自転車にまたがつた。ケイヤも僕のと同じようなマウンテンバイクに乗つている。

迷いは消え去つた。

僕は地面を蹴り、ペダルを思い切り踏み込む。

僕らの冒険は、こうしてスタートした。

僕らは国道に出ると、西に向かつて走り始める。しばらく行くと、川原にでる。川の両脇には土を高く盛つた土手があり、その上がサイクリング・ロードになつてている。対岸の土手までは五百メートルくらいの幅があり、その内側に、野球やサッカーのグラウンドや、芝生の広場、ゴルフの練習場などがある。

サイクリング・ロードは河口まで続いている。僕らは海を田指し

て進んで行く。一キロごとに海までの距離を表示した標識が立っていて、今通り過ぎたのは、海から一十七キロ、という表示。これができるくらいの距離なのか上手く理解できない。海まで自分だけの力で行けるなんて、考えたこともなかつた。僕らは海よりも、もっともつと遠い所まで行かなければならぬ。それは素晴らしいことのよつと思えたし、とんでもなく無謀なことのよつにも思えた。

風はまだ、朝の爽やかさを少しだけ残している。日差しは、もうだいぶ高くなつていて、オープンスターの遠赤ヒーターみたいに容赦なかつた。

しばらく行くと、電車の鉄橋の下をくぐる。急に日陰に入り、目の前が真っ暗に感じる。同じ日陰でも、木の陰と全然違う。家の縁の下に入ったような、湿った日陰。

「ここは昔、よつちんが川へ落ちた場所だ。

四年生のころの話だ。梅雨に入り、何日も雨の日が続いた。日曜日、久しづりに晴れたので、僕らは三人で、自転車に乗つてここまで来ていた。

多分、ヤゴとか、カニーとか、水中の生物を捕まえにきていたんだと思つ。

ただ、川の水量は多く、流れも速かつた。水は濁り、うねついて、水の中の獲物を捕まえるのは無理だと諦めた。

仕方なく、僕らは、石を投げて何回水面を跳ねさせられることができるか競い合つていた。

勝負はだんだんエスカレートしていく。水面に平行になるように、アンダースローでできるだけ低い体勢を保つ。手首のスナップを利かせて、回転をつけて投げるのがコツだ。できるだけ平たくて、丸い石を選ばなくちゃいけない。

よつちんが力いっぱい投げたとき、足が滑り、バランスを崩してしまつた。よつくりとコマ送りのようになに川の中へ落ちていく。

初め、僕らは笑っていた。ケイヤはよっちゃんのことを指差し、腹を抱えて笑っている。僕も、ドジとか、バカとか、そんなことを言ひながら笑っていたと思う。少しして、様子がおかしいことに気が付く。水かさが増えていて、背がつかないみたいだ。浮いたり沈んだりしながら流されていく。

僕はまだ泳げなかつた。だから、助けに飛び込むなんてこと、できなかつた。よっちゃんは流されていく。流れは、思つていたよりずっと速い。よっちゃんはどんどん流されていく。

戸惑いながら、僕は見ているしかなかつた。そのとき、ケイヤが川に飛び込んだ。

よかつた、ケイヤが助けてくれる。

安堵したのは束の間で、どう見ても、ケイヤはよっちゃんを助けているように見えない。明らかに、溺れている。

飛び込もうかと思つた。思つたけど、飛び込んだところで絶対助けることなんかできつこない。三人で溺れてしまつただけだ。よっちゃんが流されていく。ケイヤも流されていく。一人とも苦しそうにもがいている。沈んだと思うと、しばらくして浮き上がる。そして、また沈む。もし、次に浮き上がつてこなかつたら 考えるだけで、頭の中がグチャグチャになる。爆発しそうだ。僕は、何も考えられず、何もできず、ただ、流されていく一人について歩いているだけだつた。

下流の岸に、大きな枝が打ち上げられている。僕は走つて行つて、その枝を持ち上げようとする。重い。すくく重い。濡れてて、ヌルヌルしている。

二人は流されながら近づいてくる。早くしないといけない。全身の力を使って、抱きかかえるようにして持ち上げる。川に向かって投げ出す。まず、よっちゃんがそれにしがみつく。続いてケイヤも枝につかまつた。その重量は想像以上で、流れも速かつたから、思わず枝を離してしまつうになる。ここで離してしまつたら、よっちゃんとケイヤを助けられない。僕は必死にその枝を引っ張つた。川岸

の地面はぬかるんでいて、力が入らない。滑りやすくて、僕まで川に引きずり込まれそうになる。どんなことがあつたって、この枝を離してはいけない。すべての力を出して支える。

枝は、僕を中心に半円を描くようにして、岸に近づいてくる。ようやく、岸に生えているアシの根元によつちんの手がとどく。ケイヤもつかまろうとするが、つかみ損ねて流される。まずい！ と思つたとき、よつちんがケイヤの手をぎりぎりのところで握つていた。

ずぶ濡れの二人を岸に引き上げる。よつちんは「助かつたよ。二人は命の恩人だ」と、興奮ぎみに言った。ケイヤは助けるはずの自分が、結局助けられてしまつたことに不満があるようだつた。「もう少しで、俺が助けられたのに」そう言つた後に、「ありがとう」小さな声で、僕とよつちんに恥ずかしそうに言つた。

ケイヤは泳げなかつたらしい。泳げないくせに、よつちんを助けるために、躊躇なく川へ飛び込んだ。僕にはその勇気がなかつた。たまたまあそこに枝が落ちていたから、二人を助けることができた。もし、枝がなかつたら、僕はどうしたのだろう。一人を助けるために、川へ飛び込んだらどうか。それとも、二人が浮かび上がってこなくなるまで、見ているだけだったのか。そして、そのあと、僕はどうしたのだろう。

濡れ鼠のような二人と、僕は自転車を押しながら、このサイクリング・ロードを歩いていた。後ろから見ると、二人の濡れた足跡が、点々と地面を濡らしていた。濡れていらない自分だけが、仲間はずれになつたようで、申し訳ないよつな、切ないような気持ちになつた。

小学四年のころより、ケイヤの背中はだいぶ大きくなつた。僕もあのころより、身長が十センチ以上伸びている。前を走るケイヤの背中を見ながら、僕は自転車を漕いでいる。

今思えば、もし、僕がケイヤに続いて川に飛び込んだら、三人とも溺れて死んでいただろう。冷静に考えれば、泳げないくせに飛び込むなんてバカだ。ケイヤは思い立つと、後先考えずに行動に移してしまう。今回の自転車旅行だってそうだ。

僕は、どちらかというと慎重に考えて、止めてしまうことが多い。僕一人だったら、こんな計画、立てるわけがない。ケイヤと一緒にいるだけで、いろんなことに巻き込まれてしまう。

本当に困ったものだ。

だけど、ケイヤと一緒にだと、なんかドキドキする。

川を上ってくる風が、気持ちいい。川面が太陽を反射して、きらめいている。グラウンドでは、低学年がブカブカのユニフォームを着て野球の試合をしている。帽子とグローブがやけに大きく見える。声援をおくる幼い声。ピッチャー・ゴロで必死に走る小さなバッタ一。

鳩が僕らと並んで飛んでいる。こんな近くで飛んでいる鳥を見るのは初めてだ。鳩はゆっくりと羽ばたき、目の前を横切つて、青い空に高く舞い上がつていく。

「気持ちいいな」

僕はケイヤの横に並び、声をかける。ケイヤは僕のことを見ると、眩しそうに笑つた。ケイヤの柔らかい髪が風になびき、いつも隠れている生え際が、むき出しになる。丸みがあつて、形のいい額だ。意思の強さを表す太目の眉毛。お母さんの写真に似ている、切れ長の瞳。薄い唇に、少しどがつた細めの顎。ケイヤの顔をこんなにじっくり見たことなんてなかつた。ケイヤを好きな女子つて誰なんだろ。何か、ムカついてきた。前からランニングしている、太つたおじさんが近づいてくる。いつまで一人で並んで走れる程、道幅は広くない。僕はペダルを漕ぐ足に力を入れると、ケイヤの前に出た。空はどこまでも青く、入道雲は限りなく白く、大きかつた。

河口になると、川幅はいつそう広くなり、対岸の土手は遙か向こうに見える。大きな橋がかかり、その先に海が見えてきた。カモメが僕らの周りを滑空している。

長い橋を渡り切ると、去年、僕が家族で来た海水浴場があつた。あの時は道が渋滞して、ここに来るまでにすごく時間がかかつた。三歳年下の妹が車の中に飽きてしまって、文句を言い続けていた。

仕舞いにイライラした父さんに怒られてた。その道を、今、僕は自転車で走っている。

海岸沿いの道は、去年と同じように渋滞している。歩道も海水浴客で溢れていて、にぎやかだった。人を縫うように自転車で走つて行く。背中に照りつける太陽さえ、気持ちよく感じた。

しばらく進むと、メインの場所を過ぎたようだ。歩道の人はだいぶ少なくなつて、走りやすくなつた。車の渋滞は相変わらずで、ほんとど動いていないように見える。

僕らは車を追い抜き、スピードをつけて走つていく。渋滞に飽きあきした人たちが、僕らのことを羨ましそうに眺めている。僕らは数え切れないほど車を抜き去つた。「ヒヤッホー！」ケイヤがうしろで、喚声をあげている。僕もそれに釣られて、なにやら意味のない言葉を叫んでいた。

昼近くになつたので、道路沿いにあつたハンバーガーショップでセットを買い、海岸で食べた。遊泳禁止区域なのか、海水浴客は一人もいない。サーフィンをしている人達がいるくらいだ。夏の太陽は、真上から容赦なく照らし続ける。僕らはハンバーガーを食べ終わると、デイパックの横にスニーカーを脱いで、浜辺で足を濡らした。火照つた体に、打ち寄せる波が心地よかつた。波が引くとき、世界が海のほうへ引っ張られているような感じがする。不安定な足の裏の感覚。

短パンのギリギリのところまで、進んでいく。波が引いたときに、ケイヤがもつと前に進む。僕は負けじとその前に出る。ケイヤはさらに僕の前に進んだ。ケイヤは僕のことを振り返ると、自慢げに微笑んだ。

ケイヤのうしろから、ひときわ大きな波が押し寄せてくる。僕は後ずさりし、そして、浜辺に向かつて駆け出した。ケイヤが異変に気付いて、海のほうを向いたときには、すでに手遅れだった。波はケイヤの目前に迫つており、逃げようと浜辺のほうを向き、三歩走

つたところで、波に巻き込まれる。

波が去ったあと、そこには人影がなくなっている。しばらくして、海の中からずぶ濡れになつたケイヤが立ち上がつる。

僕は笑いながらケイヤに近づき、手を差し出す。ケイヤは僕の手を握ると、屈託のない笑顔を見せた。ケイヤはくるりとうしろを向くと、背負い投げの要領で僕のことを投げ飛ばす。不意をつかれた僕は、そのまま仰向けにひっくり返る。丁度そのとき、大きな波がやってきて、上下が分からなくなるほどゴロゴロと転がされた。鼻に海水が入つてすごく痛かった。

僕はケイヤのことを追いかけ、うしろから羽交い絞めにして引き倒した。立ち上がると、今度はケイヤが僕に襲いかかってくる。しばらく、そんなことを繰り返し、散々海水を飲んで、クタクタになつて僕らは海岸に上がつてきた。トイレの横に、簡易シャワーがあつたので、服を着たまま浴びた。一分の着替えしか持つていかない。この日差しだから、濡れたまま走つたつて、すぐに乾いてしまう。

ケイヤはテイパックから地図を取り出し、現在位置を確認する。「向こうに見える、あの山を越えて、下ったところが今日の目標だ」ケイヤの指差す方向を見る。海岸が延々と続く向こうに、半島が突き出している。その半島に、薄紫色にかすんだ山々が連なっている。あれを超えるつもりらしい。

反対側を見ると、僕らの通つてきた海岸が見える。人でにぎわう海水浴場は色とりどりのビーチを散りばめたみたいに、カラフルな模様になっている。ずいぶん走ったはずだけど、思ったほど離れていない。山までの距離の三分の一くらいしかないよう見える。その先に、峠の上り坂が待っているんだ。身体が急にだるく感じる。

僕らは自転車を漕ぎ始める。風が強くなってきた。向かい風だ。ペダルは重く、いくら漕いでも進まない。車の渋滞は解消されて、急に閑散とした雰囲気になる。午後の日差しは、勢いを増し、正面から僕らを照らし続ける。僕らは一言も喋ることなく、黙々とペダルに力を入れる。

ケイヤが僕の前に出る。正面からの風が少し和らいだ気がする。ケイヤは風よけになつてくれているのかもしれない。それでも僕はケイヤについていくのがやつとだ。ケイヤのお父さんは自転車のプロなんだ、僕なんかとは生まれ持つた才能みたいなものが違うのかもしれない。だからって、負けるわけにはいかない。僕はケイヤに必死についていく。

景色が少しずつ変わる。砂浜はまだらけの磯となり、道路沿いに干物やみやげ物を売る店が田立ってきた。山はだいぶ近づいたが、その大きさがいいよ実感できるようになり、よけい憂鬱になる。

あの山の向こうへ、よつちんがいるんだと思つと、少し力が湧いてくる。よつちんとは春休みの引越しの日から、わづ四ヶ月も会つていない。

「春休みに転校することになつたんだ」

よつちんが突然言い出したのは、五年生の二学期がもうすぐ終わろうとしているころだ。

僕らの小学校は毎年クラス替えがある。四年のとき、五年のときは運よく三人とも同じクラスになることができた。昼休みに教室で、六年のクラス替えで奇跡は起こるかとか、そんな話をしていたときだと思つ。

突然のよつちんの発言に、僕とケイヤは、意味を上手く汲み取ることができなかつた。よつちんの得意な、センスのないジョーク、なのかなと思った。それにしても、迫真的演技だ。最後のほうは言葉になつていなかつた。

「本當かよ？」

ケイヤが言つた。

「「めん……」

よつちんはうつむいたまま答へる。

「どこに引っ越すんだ？」

僕が聞くと、よつちんは聞いたことのない土地の名前を言つた。

「遠いのか？」

「この前行つたときは、高速道路を使って、車で二時間くらいかかつた」

「三時間……」

「……」

「何でそんな遠いところに越さなきゃいけないんだ」

ケイヤがイライラした声で聞く。。

「母さんが再婚するんだ。その相手がそこに住んでる。母さんの職場の工場があつて、そこの人なんだ。打ち合わせに本社に来ているときに、知り合つたらしい」

怒りのようなものが湧き上がつてきた。だけど、それを何処に向けたらいののか分からぬ。

「そんなのあるかよ！」

ケイヤが真っ赤な顔をして怒鳴つている。

「でも、お母さんが結婚するんじゃしきょうがないだろ？」
「僕は聞き取れないような小さな声で、自分に言い聞かせるように呟いた。

「翔はそんなんでいいのかよ！」

「いいも悪いもないだろ。よつちんの家族のことなんだかい？」

「なんだよ！」

ケイヤはそうこうと、教室から出て行つてしまつた。

「新しいお父さんと一緒に住むのか？」

僕は、ケイヤが出て行つた教室のドアを見ながら言つた。

「うん。そうなると思う。ごめん」

「よつちんが謝ることないだろ」

「だけ……」

よつちんは三月末に引っ越しことになつた。僕らに残された時間は一週間を切つていた。もつと話さなくちゃいけないことが、たくさんあるよつちんに思えた。もつとしなくちゃいけないことも、もつと伝えなきゃいけないことも。

残された時間を大切にしなければいけない。思えば思つほど、態度がぎこちなくなる。時間だけが流れていつた。今まで、僕らはほど

んなことを話していたんだわ。いつも何をしていたんだろ。自然に振舞つことができない。自

六年生を送り出す、卒業式があつた。よつちんと一緒に学校で過ごすのも、これで最後だ。毎年歌つている『今日の田舎はようなら』が、何でこんなに苦しんだつて、腹が立つ。

式が終わつたあと、僕ら三人は並んで歩いていた。公園の前まで来た。ここはよつちんが、木登りして下りられなくなつた場所だ。

「本当は、今年の初めに、引越しの話はあつたんだ。早く言おうと思つてたんだけど、なんだか話しつらくて、『めんね』よつちんが田の前の小石を蹴飛ばす。

「お正月に母さんが、再婚したいって言に出したんだ。でも、もしぼくがどうしても嫌なら断つてもいいって」

「じゃあ、断ればよかつたじゃないか。よつちんだつて本当はそのほうがいいんだろ?」

ケイヤはよつちんが蹴つた石を、もう一度蹴る。

「うん。よく分からない……」

母さんは離婚してから、ずっと落ち込んで、ぼくは母さんが元気になるようついて、いろいろ努力したんだ。わがままは言わないようとにかく、笑顔でいようとか、まあ、そんなことくらいしかできないんだけど、できるだけ頑張つてはいたんだ。だけど、母さんは少し微笑んでくれるんだけど、すぐに暗い顔に戻つちゃう。夜、一人で泣いていることも、一度や一度じやなかつた

公園には桜の木がたくさんあつて、満開のときは花見の客が押し寄せる。お祭りみたいになる。

薔は大きく膨らんでいるが、まだ花は咲いていない。

「それがさあ、去年の暮れから、母さん急に明るくなつて、洋服も華やかになつたんだ。よく笑うようになつたし、綺麗になつた。そのころに田代さん、つまり今度の再婚相手に出会つたらしこんだ。

ぼくが嫌だつて言つたら、あの暗くて、泣いてばかりいる母さんに戻つてしまふんぢやないかなつて思つたら、言えなかつた。それに、ぼくがどんなに頑張つてもできなかつたことを、田代さんは簡単にやつてのけたんだ。母さんに本当に必要なのは、ぼくよりも田代さんなんだと思つ

桜の木に、一輪だけ花が咲いている。今年見る、最初の桜だと僕は思つた。

「その相手は、どんな奴なんだ？」

ケイヤは蹴つていた石を拾い、桜の木の根元に向かつて投げながら言つ。

「うん。どつてもいい人だよ。いい人過ぎる感じ」
よつちんも一輪だけ咲いた桜を見つけたよつだ。上を向き、田を輝かせる。

「翔くんやケイヤ君と一緒に過ぐすのよりも、母さんが笑つていることのほうを選んだんだ。裏切り者だよね。本当にアメン」
「そんなことないよ……」

そのあとの言葉が続かなかつた。お母さんの幸せを願つのは当たり前だし、僕だって、よつちんの立場だつたらそうしたに決まる。だけど、やつぱりよつちんと会えなくなつてしまつのは寂しい。どうしようもないことなんだろうか？　どうにかすることはできないのか？　そのためだつたら、僕はどんな努力でもする。一生懸命勉強して、今度のテストで百点取るとか、毎日ランニングして、運動会で一等になるとか　　今の僕らには、努力することすらできない。

ケイヤも桜を見つけたよつだ。上を向き見つめている。そしてつぶやくように言つ。

「離れたつて、俺たちの何かが変わるわけじゃないよ。何も変わらない。

会えなくなることで、よつちんの家族が幸せになるなら、それく

「うちは我慢するよ。大丈夫。何も変わらないんだから、裏切りとかそんなことあるわけない」

よつちんが引っ越しには、桜は満開になつていてるんだね。僕らがどんなことをしようが、感じよつが、春は勝手にやつてきて、夏が来て、また冬になる。

ただ、それだけのことなんだろう。

引っ越しの日、僕とケイヤは見送りに行つた。

よつちんのマンションの前は桜並木になつていた。穏やかな春の風が吹き、その風の形に桜の花弁が舞つている。

マンションから引越し業者がよつちんの勉強机を運び出している。よつちんのお母さんが、僕らに挨拶する。その声が少しあしやいでいるように聞こえる。僕らは首をすくめるよつちんにして、挨拶を返す。

「できるだけ、丁寧に作つたんだけど」

よつちんは僕とケイヤそれに箱を渡す。開けると中には完成したガンダムのプラモデルが入つている。よつちんはプラモデルを作るのがすごく上手だ。細かいところも精確に作るし、何より塗装の技術が半端じゃない。エアーブラシを使って、何回にも分けて塗り、そのあと研磨までする。とても時間がかかる。よつちんの部屋に行つたとき、飾られている何体ものプラモデルがあつて、僕とケイヤで、すごいなつて、見とれていたんだ。

「これ、俺たちのために、わざわざ作つてくれたのか？ 時間かかつたろう」

ケイヤは今にも泣き出しそうな顔をしている。

「うん、ぼくにできることがないから、一生懸命作つたんだ」

プラモデルの部品、一つひとつによつちんの気持ちが込められて
いるのが分かつた。夜中に丁寧にパーツを組んでいるよつちんの姿
が、目に浮かんだ。

「ありがとう。大切にする」
僕が言つ。隣のケイヤの口が、ありがとう、と動いたが、声が出
ていない。

業者的人が、荷物の搬出が終わったので、そろそろ出発すると言
う。それによつちんのお母さんが明るい声で答える。

「困つたことがあつたら、いつでも助けに行くからな
多分、ケイヤはそう言つたんだと思つ。

「頑張れよ」

僕は手を差し出した。もしかすると、よつちんともう会えないの
かもしない。鼻の奥がジンとして涙が出そうになつた。でも、泣
かなかつた。もし、泣いてしまつたら、本当にこれで最後になつて
しまうような気がしたからだ。

よつちんも泣いていない。僕の目を見つめて、しつかりと手を握
り返してきた。

よつちんの手は、思つていたよりも大きくてしつかりしていた。
おとなの手みたいに頼りがいがあつた。

よつちんは僕との握手のあと、ケイヤに手を差し出した。ケイヤ
はその手を握る。ケイヤは顔をクシャクシャのして、涙を流してい
る。何か言つたが、よく聞き取れなかつた。多分、いつでも行
くとか、そんなことを言つたんだと思つ。

「ありがとう」

よつちんは言つと、お母さんの運転する軽自動車に乗つた。引越
し業者の車に続いて、よつちんの乗つた車もスタートする。
よつちんはうしろを振り返り、いつまでも手を振つてゐる。僕と

ケイヤも車が見えなくなるまで、手を振り続けた。横を見ると、ケイヤが服の袖で涙を拭つている。

強い風が吹き、一斉に桜の花弁が舞い上がった。た世界の中、僕はケイヤと二人きりで立っていた。

桜色に染められ

僕はケイヤの「うしろを、遅れを取らなによつて、ペダルを漕ぎ続ける。

『よつこい』 温泉へ』

道路に大きな看板がかけられている。それを過ぎると、ホテルや旅館が目立ってきた。街の中心部には、お土産を売る店や、遊技場が並んでいる。温泉街特有の雰囲気だ。

この場所は突き出した半島の付け根にあたり、ここから山を登る道に入つていいく。コンビニで飲み物を買って、道路の縁石に座つて飲んだ。

目の前に山がそびえ立つている。自転車で超えようなんて、まともじゃない。ケイヤだって見上げて、自信のなさそうな顔をしている。誰がこんな計画立てたんだって、文句の一つも言いたくなる。今更そんなこと言つたからって、どうなるもんでもない。引返すつてわけにもいかない。まあ、行くしかないのかと、覚悟を決める。覚悟は決めたが、自分から出発を切り出す気力がない。縁石に座つたまま、地面に点々と染みを作る汗の滴を数えていた。

ケイヤは立ち上がり、両手でズボンについた砂をはたいた。座つている僕のことを上から見下ろす。仕方ない。僕はゆっくり立ち上がり、ゆっくりとズボンの砂を落とす。そして、ゆっくりと自転車にまたがる。

坂を上り初める。勾配はきつい。とたんによろめき倒れそうになる。自転車のギアを低くしてどうにか耐える。たいして進まないうちに太ももの筋肉がパンパンに膨らんではち切れそうになる。

傾斜にそつてホテルが点在していたが、やがて建物はなくなり、山の中の道となる。

僕の前をケイヤが走つている。懸命についでにこうとするが、引

き離されてしまう。悔しい。悔しいけどビビりじゃない。僕とケイヤの距離はだんだんと開いていく。

しばらく行くと、ケイヤが止まって、地図を広げている。道が左右に分岐している。僕が追いつくと、少し休むかと自転車から降りて、ガードレールの横に腰をかけた。僕もケイヤの横に座る。分岐した道が合流した場所に『ようこそ 温泉へ』という看板が立っていた。

「やっと温泉街から出ただけか」

「登りの四分の一くらいきたよ。大丈夫か？」

ケイヤが地図を見ながら言つ。

「エヘエエ……」

僕は力なく笑うしかなかつた。

「この道、どっちに行つても峠には出られそうだけど、左は大回りしてから、右から行つたほうがきっと近いと思うんだけど」

ケイヤは僕に地図を見せた。僕は地図を見る余裕もなく、見もせず頷いた。

出発する。太陽は山の斜面の向こう側に隠れている。空はまだ明るいけど、木々に囲まれた道は薄暗い。ヒグラシがいたるところで鳴いている。カナカナと高音で鳴き続ける声は不気味だ。また僕はケイヤに引き離され始める。負けるか、と思うのは気持ちだけで、身体が言つことを聞かない。せめて、歩いたりせず、自転車でこの山を上りきつてやる。汗が額から流れて、目に入る。それがすごくしみる。涙が出来る。何度も拭うんだけど、止まらない。

車はときどき擦れ違うくらい。近くに自動車専用の有料道路が走っているから、多くの人はそっちを使うんだろう。

うしろからすごいスピードで白いバンが上ってきて、僕らを抜き去つていった。前を行くケイヤのすぐ脇を通り過ぎて、ぶつかったんじゃないのか。僕はケイヤのうしろを、遅れを取らないように、ペダルを漕ぎ続ける。

『ようこそ　温泉へ』

道に大きな看板がかけられている。それを過ぎると、ホテルや旅館が目立つてきた。街の中心部には、お土産を売る店や、遊技場が並んでいる。温泉街特有の雰囲気だ。

この場所は突き出した半島の付け根にあたり、ここから山を登る道に入つていく。コンビニで飲み物を買って、道路の縁石に座つて飲んだ。

目の前に山がそびえ立つている。自転車で超えようなんて、まともじゃない。ケイヤだって見上げて、自信のなさそうな顔をしている。誰がこんな計画立てたんだって、文句の一つも言いたくなる。今更そんなこと言つたからつて、どうなるもんでもない。引返すつてわけにもいかない。まあ、行くしかないのかと、覚悟を決める。覚悟は決めたが、自分から出発を切り出す気力がない。縁石に座つたまま、地面に点々と染みを作る汗の滴を数えていた。

ケイヤは立ち上がり、両手でズボンについた砂をはたい。座つている僕のことを見下ろす。仕方ない。僕はゆっくり立ち上がり、ゆっくりとズボンの砂を落とす。そして、ゆっくりと自転車にまたがる。

坂を上り初める。勾配はきつい。とたんによろめき倒れそうになる。自転車のギアを低くしてどうにか耐える。たいして進まないうちに太ももの筋肉がパンパンに膨らんではち切れそうになる。

傾斜にそつてホテルが点在していたが、やがて建物はなくなり、山の中の道となる。

僕の前をケイヤが走つている。懸命についていこうとするが、引き離されてしまう。悔しい。悔しいけどどうしようもない。僕とケイヤの距離はだんだんと開いていく。

しばらく行くと、ケイヤが止まって、地図を広げている。道が左右に分岐している。僕が追いつくと、少し休むかと自転車から降りて、ガードレールの横に腰をかけた。僕もケイヤの横に座る。分岐

した道が合流した場所に『ようこそ温泉へ』という看板が立てられていた。

「やつと温泉街から出ただけか」

「登りの四分の一くらいきたよ。大丈夫か?」

ケイヤが地図を見ながら言つ。

Г Н < Н Н
Н Н

業は力なく笑ひしがなかつた。

「この道、どっちに行つても峠には出られそうだけど、左は大回りしてゐるから、右から行つたほうがきっと近いと思うんだけど」ケイヤは僕に地図を見せた。僕は地図を見る余裕もなく、見もせずに頷いた。

出発する。太陽は山の斜面の向こう側に隠れている。空はまだ明るいけど、木々に囲まれた道は薄暗い。ヒグラシがいたるところで鳴いている。カナカナと高音で鳴き続ける声は不気味だ。また僕はケイヤに引き離され始める。負けるか、と思うのは気持ちだけで、身体が言うことを聞かない。せめて、歩いたりせず、自転車でこの山を上りきつてやる。汗が額から流れて、目に入る。それがすくしみる。涙が出る。何度も拭うんだけど、止まらない。

車はときどき擦れ違うくらい。近くに自動車専用の有料道路が走っているから、多くの人はそっちを使うんだろう。

うしろからすごいスピードで白いワゴン車が上ってきて、僕らを抜き去つていった。前を行くケイヤのすぐ脇を通り過ぎて、ぶつかつたんじゃないかってドキリとしたけど、接触はしなかつたみたいだ。

空は青からオレンジ色に変わってきていた。ケイヤは僕の遙か先を走っている。僕だって、何度もくじけそうになりながら、頑張つてるんだ。

うじろを振り返ると、上り口の温泉街が見える。けつこう高くま

で上ってきていた。その向こうに通ってきた海岸がかすんで見える。その先にも半島があつて、海岸は全体で大きな弧を描いて湾になつてゐるのが分かる。

何がすごいところまで来てしまつた。

多分、もう少しで峠にたどり着くはず。峠さえ越えてしまえば、あとは坂を下るだけだ。この坂を上り終えたら、峠かと思う。しかし、坂を越えると、少しの間平坦な道になつて、先にまた上り坂が待つてゐる。今度こそ！ その先に頂上があると信じて、ペダルを踏む。

何度も失望を繰り返している。心が折れそうになつた。そのとき、次の坂の頂上にケイヤが立つてゐるのが見えた。ケイヤが手を振つて笑つてゐる。

僕はフラフラと蛇行しながら、ケイヤの元にたどり着いた。ケイヤは待ちかねていたようで、地図を見ながら言つた。

「お疲れ！ あとは下るだけだから、このまま行こうぜ。早くしないと日が暮れちゃう」

峠では、道が二股に分かれていて、ケイヤは左の道を下つていく。僕は、デイパックからペットボトルを取り出し、水分補給するとケイヤのあとに続いた。

「イエエエエ」

全身に風を受けながらケイヤが叫んでいた。僕もそれに続く。風が気持ちいい。景色がうしろに吹つ飛んでいく。今までの苦労がすべて報われた気がする。

「麓まで競争な」

僕が並ぶと、ケイヤは楽しそうに言い、スピードを上げる。左右に大きく蛇行する坂道で、ケイヤはほとんどブレーキをかけずにカーブに入つていく。僕は我慢しきれず、ブレーキをかけてしまう。またもやケイヤに引き離される。

ケイヤはものすごいスピードで坂を下つていく。僕も必死に追いかける。

右側に分岐する道があつたが、ケイヤはスピードを緩めずにそこを通過する。右側の道は、斜めうしろに分岐していたので、僕らの方向からだと見づらい。目的地を指す標識が出てたけど、木の枝が覆いかぶさって、よく見えなかつた。

ケイヤはすでに前のカーブを曲がつてゐる。僕は見失わないようにするのが精一杯だ。

そのとき、視界が開け、海が見えた。

背筋が凍つた。

「ケイヤ！！」

あらん限りの声を出した。

「ケイヤ！ とまれ！！」

ケイヤは遙か先を走つていて、僕がどんなに叫んだつて、声なんか届かない。

「ケイヤ！ とまつてくれよ」

そんなの分かつてゐるが叫び続けた。

お願ひだから、ケイヤ気付いてくれ。

僕は叫びながら泣いていた。「ケイヤ！」叫ぶたびに、声はむなしく山々に吸収されていく。涙と鼻水とよだれで、僕の顔はグチャグチャになつた。胃の辺りがムカムカして吐き氣がした。全身を寒気が襲う。

多分、今僕が感じてゐるのは、恐怖だ。

目の前に広がる湾の形は、見覚えのあるものだつた。麓に温泉街の街並みも見える。ケイヤはカーブを抜けることに集中して、景色なんて見ていないんだ。こんなことがあるはずがない。これは夢なんじやないか。本気でそう思つた。

僕らは上つてきた坂を、違う道で下つてゐるんだ。

僕がカーブを抜けても、ケイヤの姿は見えなかつた。次のカーブ

をすでに曲がつてしまつてゐるんだ。僕はもう叫ぶのを止めた。何も考えられなかつた。ブレーキを握ることさえ億劫に感じた。

俺、方向音痴なんだ、そう言つてゐるケイヤの姿が脳裏に浮かんだ。あれは確か、よつちんと三人で駅前に映画を見に行つたときだ。映画館の前で待ち合わせしたら、ケイヤがいつまで待つても来て、あとで聞いたら、全然違う方向に行つてたんだ。

観にいつたのは何の映画だつたけ？ 結局その映画は観れたんだつけ？

何も思い出せない。
もうそんなのどうでもいい……

覆つてゐる木々が途切れ、視界が開けるたびに海は近づいてくる。僕はもう何も感じなくなつていた。

しばらく行つて、道が合流したところで、ケイヤが待つてた。目がキヨトンとして、顔が青ざめているように見える。ケイヤのうしろには『ようこそ　温泉へ』と書かれた大きな看板が立つっていた。

つてドキリとしたけど、接触はしなかつたみたいだ。

空は青からオレンジ色に変わつてしまつてゐる。ケイヤは僕の遙か先を走つてゐる。僕だつて、何度もくじけそうになりながら、頑張つてるんだ。

うしろを振り返ると、上り口の温泉街が見える。けつこう高くまで上つてきてゐる。その向こうに通つてきた海岸がかすんで見える。その先にも半島があつて、海岸は全体で大きな弧を描いて湾になつてゐるのが分かる。

何かすごいところまで來てしまつた。

多分、もう少しで峠にたどり着くはず。峠さえ越えてしまえば、

あとは坂を下るだけだ。この坂を上り終えたら、峠かと思う。しかし、坂を越えると、少しの間平坦な道になつて、先にまた上り坂が待つている。今度こそ！ その先に頂上があると信じて、ペダルを踏む。

何度も失望を繰り返している。心が折れそうになつた。そのとき、次の坂の頂上にケイヤが立つてするのが見えた。ケイヤが手を振つて笑つてている。

僕はフラフラと蛇行しながら、ケイヤの元にたどり着いた。ケイヤは待ちかねていたようで、地図を見ながら言った。

「お疲れ！ あとは下るだけだから、このまま行こうぜ。早くしないと日が暮れちゃう」

峠では、道が二股に分かれていて、ケイヤは左の道を下つていく。僕は、デイパックからペットボトルを取り出し、水分補給するとケイヤのあとに続いた。

「イエエエエ」

全身に風を受けながらケイヤが叫んでいる。僕もそれに続く。風が気持ちいい。景色がうしろに吹つ飛んでいく。今までの苦労がすべて報われた気がする。

「麓まで競争な」

僕が並ぶと、ケイヤは楽しそうに言い、スピードを上げる。左右に大きく蛇行する坂道で、ケイヤはほとんどブレーキをかけずにカーブに入っていく。僕は我慢しきれず、ブレーキをかけてしまう。またもやケイヤに引き離される。

ケイヤはものすごいスピードで坂を下つてていく。僕も必死に追いかける。

右側に分岐する道があつたが、ケイヤはスピードを緩めずにそこを通過する。右側の道は、斜めうしろに分岐していたので、僕らの方向からだと見づらい。目的地を指す標識が出てたけど、木の枝が覆いかぶさって、よく見えなかつた。

ケイヤはすでに前のカーブを曲がつている。僕は見失わないよう

にするのが精一杯だ。

そのとき、視界が開け、海が見えた。

背筋が凍った。

「ケイヤ！！」

あらん限りの声を出した。

「ケイヤ！ とまれ！！」

ケイヤは遙か先を走っていて、僕がどんなに叫んだって、声なんか届かない。

「ケイヤ！ とまってくれよ

そんなの分かっているが叫び続けた。

お願いだから、ケイヤ気付いてくれ。

僕は叫びながら泣いていた。「ケイヤ！」叫ぶたびに、声はむなしく山々に吸収されていく。涙と鼻水とよだれで、僕の顔はグチャグチャになった。胃の辺りがムカムカして吐き気がした。全身を寒気が襲う。

多分、今僕が感じているのは、恐怖だ。

目の前に広がる湾の形は、見覚えのあるものだった。麓に温泉街の街並みも見える。ケイヤはカーブを抜けることに集中して、景色なんて見ていないんだ。こんなことがあるはずがない。これは夢なんじやないか。本気でそう思った。

僕らは上ってきた坂を、違う道で下っているんだ。

僕がカーブを抜けても、ケイヤの姿は見えなかつた。次のカーブをすでに曲がつてしまつていてるんだ。僕はもう叫ぶのを止めた。何も考えられなかつた。ブレーキを握ることさえ億劫に感じた。

俺、方向音痴なんだ、そう言つてゐるケイヤの姿が脳裏に浮かんだ。あれは確か、よっちゃんと三人で駅前に映画を見に行つたときだ。映画館の前で待ち合わせしたら、ケイヤがいつまで待つても来なく

て、あとで聞いたたら、全然違う方向に行つてたんだ。
観にいったのは何の映画だつたけ？ 結局その映画は観れたんだ
っけ？

何も思い出せない。
もつそんなのひとつでもいい……

覆つている木々が途切れ、視界が開けるたびに海は近づいてくる。
僕はもう何も感じなくなつていた。

しばらく行って、道が合流したところで、ケイヤが待つていた。
目がキヨトンとして、顔が青ざめているように見える。ケイヤのう
しろには『よひこや 温泉へ』と書かれた大きな看板が立つてい
た。

「道……、間違えたみたいだ……」

僕は何も答えない。

「でも、今日中に山を越えておかないと、明日、よつちんの所までたどり着けなくなる」「

僕は何も答えない。

もう日は落ちてしまつて、真つ黒な雲が空を半分くらい覆つている。温泉街にネオンが灯りはじめた。

「もう一回上るしかない」

ケイヤは言うと、自転車を漕ぎだした。

僕はもう自転車に乗る気力はなくなつてしまつて、自転車から降りると、それを引いて歩いて坂道を上りはじめた。ケイヤもしばらく進んだあと、自転車から降りて、歩きだす。どこかで雷の音が響く。

僕らは十メートルくらいの距離をあけて、一言も言葉を交わさず、自転車を押して、坂道を進んだ。

急に空が暗くなる。一瞬、閃光が走り、しばらくしてから地響きのようだ、雷鳴が轟く。

下からパトカーがサイレンを鳴らしながら上がつてくる。こんな場所で、自転車を押していて、何か言われるかと思ったが、先を急いでいるらしく、僕らには目もくれずにパトカーは峠のほうへ消えていった。

大粒の雨が自転車のハンドルを握る右手の甲に当たつた。雨か？

思ったときに、額に滴を感じた。首筋、左腕、と続いたあと、一斉に雨が落ちてきた。

夜のような暗さになり、時折、稻妻が光る。間をおかないで雷鳴が響く。雲に近いせいか、今まで聞いたどんな雷よりも大きな音で、地面まで揺れている。雷が鳴るたびに、身体がすくみ上がる。自転

車は金属でできているから雷は落ちやすいのだろうか。風は急に強まり、大きな木々がしなりながら揺れる。身体はあつと/or/間にずぶ濡れになつた。体温が奪われていく。

引き返すわけにいかないし、止まることもできない。強い風雨に前を見ることもできずに、自転車の前輪を見つめ、ハンドルに力を込め、ひたすら、黙々と、坂を歩んでゆく。

僕がケイヤと喧嘩したときも、今みたいに強い雨が降つていた。小学校三年の夏休みが終わつて、一学期にも少し慣れてきたころだ。昼休み、雨が降つていたからグラウンドには出られず、僕らは教室で話をしていた。

「昨日、梶山公園でこんなにでかい蛇を見たんだぜ」

ケイヤは両腕を一杯に広げて、蛇の大きさを示す。

僕は力チンときた。なぜかつて言つと、昨日の日曜日も一日中雨だつたからだ。雨の日にわざわざ梶山公園なんか行くわけがない。ケイヤのお得意のホラが出た。

ケイヤはよく嘘をついた。僕が虫が嫌いだと言つと、次の日に、体育館の裏で三十センチの大きなムカデがいたとか、自分の家には毎日十匹以上のゴキブリが出て、捕まえてビンに入れて飼つているだと、そんは話をし始める。僕は初めのころ、全部本当の話だと思って、ゴキブリを飼つているケイヤの家には絶対に行かないと、心に決めていた。学校の帰りにUFOを見て、そこからパンダに似た宇宙人が出てきた話とか、夜眠れないときに墓場を散歩してたら変な世界に紛れ込んでしまつた話とか、薄々怪しいとは思つていた。前の週にケイヤが、自分の父親がオリンピックに出たことがあると言い出した。僕は半信半疑だつた。家に帰つて、父さんに聞いたら、そんな選手は知らないと言つ。ネットで調べてもらつたけど、自転車関係の競技で辻田なんて選手は、何年遡つたつていなかつた。やっぱり嘘だつた。

僕はそのことで、敏感になっていたんだと思う。

「昨日、一日中雨だつたのに、何で公園なんか行つたんだよー。」

僕は初めから喧嘩腰だつた。

「あつ、違つた、おとといだ」

僕はその一言で、キレてしまつた。

「嘘つき！」

「嘘じやないよ。昨日とおととい間違えただけだつて」

氣付いたときには、ケイヤの右頬を殴つていた。初めて、人のことなんて殴つた。人差し指と中指の付け根が、ジンジンして痛かつた。ケイヤはポカンとした顔をしたまま、突つ立つてゐる。

「ケイヤの言つことなんて、全部嘘じやないか！ 最初に昨日つて言つたじやないか。嘘がばれたからつて、また嘘つくのかよ。川原にワニなんかいないし、蟻の行列の中に、全身を黒く塗つた小人が混じつてるわけないだろ！ お前のお父さんだつて、オリンピックなんて出でないじやないか！」

怒鳴つてゐるうちに、感情が高ぶつてくる。呼吸が苦しい。頭の芯で何かが弾けた。僕はケイヤに飛びかかつた。そのとき、スローモーションで近づいてくるケイヤの拳が見えた。僕の左目にゆつくりと迫つてくる。直後、今まで味わつたことのない衝撃が顔面に走つた。なるほど、殴られたときには、本当に星が見えるんだ、なんて間の抜けなことを考えながらうしろに倒れる。

「ふざけんな！」

僕は立ち上ると再びケイヤに飛びつく。今度はみぞおちにケイヤの蹴りが入る。息ができなくなつて、目の前がクラクラする。だけど、僕は蹴り上げたケイヤの右足を抱えて離さなかつた。そのまま突進したら、ケイヤはバランスを崩して倒れた。僕はケイヤの上に馬乗りになる。ケイヤの両肩に膝を乗せるとケイヤは動かなくなつた。

「ケイヤの言つてることは、全部嘘じやないか！」

僕はケイヤの胸倉をつかんで、上下に揺らす。ケイヤは悲しそう

な目で僕のことを見ている

「この前だつて……」

言葉が詰まつた。

何でそんな悲しそうに見るんだ。嘘をついたケイヤが全部悪いんだろ。もうそんな目で見るなよ。

まずい！ このままでは泣いてしまう。

クラスにいた全員の生徒が僕のことを見ていた。三年生にもなつて、みんなの前で泣いてしまつたら、一生取り返しのつかないことになる。一言でも発したら、声が震えて、嗚咽になつてしまいそうだ。

僕は慌てて教室を飛び出した。

一人で過ごす昼休みは、とても長く感じた。いつもなら二人で喋つたり、グラウンドでドッヂボールしている時間だ。他の友達が遊んでいるのに入れてもうつ氣にもなれない。かといって、ケイヤがいる教室に戻るのも嫌だ。トイレで鏡を見ると、左目の下が、少し赤くなつて腫れていた。手で触ると痛みが走る。僕は小学校の全ての階の廊下を歩き回り、時間を潰した。雨はまだ強く降り続いている。廊下の窓から外を見ると、泥の中に沈んだように暗かった。おやゆび姫に出てくる、金持ちのモグラの住む世界を思い出した。太陽のない暗い世界。きっとこうやって土の中に通路があつて、教室がモグラの家だ。確かに、おやゆび姫はツバメに助けられて、お花の国へ連れて行つてもらつたんだ。

窓の外を見る。

僕をどこかへ連れ出してくれそつな者は、どこにもいなかつた。

やつと、五時間目の開始のチャイムが鳴つた。僕が教室に戻ると、ケイヤとよつちんが何か話していた。僕のことを見て、話すのをやめる。僕はそのことで、余計腹が立つてきて、乱暴に次の授業の教

科書を取り出すと、わざと音をたてて、机の上に放り投げた。

ケイヤの頬は赤くもなっていない。僕の右手は中指の辺りがジンジン痛んで、少し赤くなっていた。頭の中がシワシワし始めた。気が付いたら下唇を強く噛んでいて、血の味がした。

五時間目が終わって、六時間目が始まるまで、僕は自分の席に座つたまま、窓の外を見続けていた。ケイヤはつづ伏して眠つた振りをしている。よつちんがどうしたらよこか分からぬみたいで、立ち上がり廊下へ出てみたり、戻ってきて席に座つたり、また廊下へ出てみたりと、三回くらい同じことを繰り返していた。

六時間目の授業が終わると、僕は一番に席を立ち、そのまま校門に向かつた。校門を出たところで、よつちんが追いついてきた。

雨は小降りになつたけど、一人とも傘を差したまま歩いている。よつちんは並んで歩くばかりで、何も話しかけてこない。雨の音と、よつちんと僕の湿つた足音だけが聞こえる。

「なに？」

よつちんはなんにも悪くないのに、まるで責めるような口調になつてしまつ。

「うん」

よつちんは困つたよつこ、頭をかいている。

「前から思つてたんだけどわあ、ケイヤの言つてる」とつて、嘘ばつかりじゃん！ 僕は嘘つきは大嫌いだ。もつ我慢できなこ

「うん……」

「よつちんも、やう思つだろ？」

「だけど……」

「なんだよ？」

「……ケイヤ君のお父さんがオリンピック出たのは本当だよ。ぼく達が生まれる一年前にやつた冬季オリンピックのスケートの選手だつたんだ」

「冬のオリンピックまでは調べなかつたけど……」

「ケイヤ君のつべ嘘つて、全部ぼく達を楽しませよつとしてついているんだよね」

よつちんが傘をたたみながら、つぶやく。

確かに、ケイヤの嘘は、僕らを笑わせたり、怖がらせたり、つまり楽しめよつとしてついているのかもしれない。自分を大きく見せよつとか、見栄を張つて嘘をついているわけじやない。それは分かる。そして、僕らがケイヤの話で笑うと、ケイヤは本当に嬉しそうな顔をする。だからつて、嘘をついていこにはならない。ケイヤがちゃんと謝るまで、僕は絶対に許さない。絶対にだ！

僕はそう思った。

そのあとどうしたのか、ケイヤは僕に謝つたのか、思い出せない。僕があらためてケイヤのことを許したという記憶もない。気が付いたら、僕らは、いつもみたいに遊んでいたんだと思う。ただ、あのとき以来、ケイヤは嘘をつかなくなつた

雨は一段と激しさを増し、土砂降りだ。前を自転車を押して歩くケイヤの姿も、霞んでよく見えない。突然、閃光が光り、ケイヤの背中がフラッシュを浴びたように、浮かび上がる。地響きを伴う雷鳴が轟く。道を渓流のように水が流れる。

ケイヤはときどき振り返るが、僕と田を合わせようとはしない。僕がついてきているのを確認すると、すぐ前を向いて、自転車を押す。

ケイヤだって、わざと間違えたわけじゃない。それは分かっている。だけど、ゴメンの一言ぐらいは言つべきだ。何であいつは謝らないんだ！ やつぱり腹が立つ。

最初、看板があつた二股道でケイヤが僕に地図を見せたとき、僕は地図を見ることもしなかつた。判断も責任もケイヤに押し付けていた。そして、ミスをしたときだけ責めるのは、卑怯なのか。僕にはケイヤを怒つたりする資格があるのか。よく分からない。疲れた。何も考えたくない。もう眠い……

こつ之間にか、雨は小降りになつていて。田は沈み、周りは真つ暗だ。道路灯に照らされた見覚えのある景色。やつと前にたどり着いた。ケイヤが地図を広げる。僕は横に並んで、その地図を見る。

「さつや、この道をケイヤが見逃して、左のほうへ行っちゃたんだよー。」

責めるつもりはもうなかつたけど、語氣が少し強くなる。

「うん……」

ケイヤはそれだけ言つと、自転車に乗つて坂を下り始める。

自転車のライトを点けるが、二人の持つている「EELIGHT」は、こちらの存在を相手に知らせるもので、照明としての機能は高くなない。特に道路灯があつた他は、道路沿いの照明はない。空はまだ厚

い雲で覆われていて、自転車のライトがなければ、目の前にかざした自分の手も見えないほど暗い。僕はケイヤのライトを頼りに進んでいる。ケイヤはほとんど先が見えないはずだ。目の前に、急に山肌が現れ、ケイヤの自転車が危なくそれに接触しそうになる。バランスを崩して足をついた。

ケイヤは再び漕ぎ出そうとする。

「もう無理だよ…」

ケイヤは、黙つて走り出すが、何メートルも進まないうちに、側溝に落ちそつになつて慌てて自転車を止める。

「だから無理だつて… これ以上進めないよ」

道の脇に車が一台止められるほどスペースが開いている。僕はそこに自転車を置くと、地べたに座り込んだ。雨はやんだようだ。地面は濡れているが、僕だつてビショビショだ、構うことはない。ケイヤは僕から三メートルくらい離れたところに座る。自転車のライトは点けてあるが、真つ暗でほとんど何も見えない。ケイヤが闇の中に薄つすらと浮かんで見える。僕と同じように膝を抱え込んでうつむいている。地面がヌルヌルして気持ち悪い。絶対、虫とか出てきそうだ。そう思うと、何も見えないのはすこく怖い。風で揺れて物音がするたびに、僕はビクリとする。一の腕のところで、何かが動いた気がした。慌てて払いのける。見えないから、虫がいたのか、滴がたれたのか分からない。とてもじゃないけど、こんなところで眠れるわけがない。

だから嫌だつていつたんだ！

お腹が減つた。山の下まで降りる予定だつたから、食べ物なんて持つてない。予備の食料くらい何か買っておけばよかつたんだ。僕はデイパックの中からペットボトルを出して、水を飲む。

ケイヤは膝を抱えたまま動かない。まさか一人で寝てるんじゃないだろうな！

涙がこぼれる。止まらない。嗚咽が漏れそうになる。ケイヤに泣いてることを気付かれるくらいなら、死んだほうがましだ。歯をく

いじばって、舌を上あごに押し付け、必死に堪える。落ち着いたかと思うと、次の感情の波がやってくる。左右の膝の間に顔をうずめて、呼吸を整える。ゆっくりと息を吸う。その息をゆっくりと吐く。息を吸う。吐く……

「おい、起きろよ」

ケイヤの声で僕は目を覚ます。どうやら、膝を抱えたまま眠ってしまったらしい。目を開けると、周りの景色が違っている。全てのものが青白い光に包まれている。濡れたアスファルトに僕の影がうつっている。ケイヤの顔もハッキリ見える。

空を見上げると、覆っていた雲は消え去り、真ん丸の月が高く昇っていた。手も服も、倒れた自転車も、全てが青く輝いている。木々の葉についた水滴が、月光を反射して煌き、巨大なクリスマスツリーのように見える。世界の全てが、青いセロファン紙を通して見たようだ。4年の夏休みの工作で作った、水族館を思い出す。煎餅の箱に青いセロファン紙を張つて、中に厚紙を切り抜いた魚やサンゴを貼り付けた。僕はその世界に入り込んでしまったような錯覚を覚えた。

まるで海の底だ！

「もう少しマシなところまで移動しよう」

ケイヤはもう自転車に手をかけている。

道路上に引かれたセンター・ラインが僕らの進む道を示すように光っている。これなら十分進むことができる。風は強く、濡れたまま、眠ってしまったため、真夏とはいえ身体は冷え切っていた。

「せめて、この風が防げる場所を探そう」

ケイヤは自転車にまたがり、僕のことを振り返る。

「う、うん」

僕は目をこすりながら立ち上がると、倒れていた自転車を起こす。

身体の節々が堅く固まっている。一度伸びをして、自転車にまたがる。

それほどスピードは出さない。海の底を滑らかに進むイルカの気分だ。さつき間違えた、分岐を右に曲がる。両脇を木々に囲まれているが、正面には大きな満月がある。月の光がこんなにも明るいなんて、信じられない。青い世界が緩やかにうしろに流れしていく。カーブを曲がると、海が見えた。前とは違う形の海だ。月は海上にあり、海にも大きな月が揺らめいている。その周りに、航行する船のライトが瞬いている。陸地には家々の光が天の川のよつに連なつていて。

僕はケイヤに並んだ。

「何か、すごいな」

「うん。宇宙旅行してるみたいだ」

ケイヤの瞳の中にも、無数の星が輝いているように見えた。

「ホント。すごいよな！」

「すげーな！」

「スッゲー！」

僕らは二人揃つて、何度もなんども「スッゲー！」と叫びながら、坂を下った。

峠をほぼ下りきった辺りに、レストラン『サニー』と書かれた看板が立っている。白い壁にピンク色の屋根、開店当初はメルヘンチックな店だったんだろう。しかし、白い壁はいたるところのペンキが剥がれ、窓ガラスは割れ、内側から乱暴にベニヤ板で塞がれている。廃業して、そのまま放置されているようだ。

ケイヤはその前で自転車を止める。

「ここなら、中に入れるんじゃないかな？」

「でも、何かやばそう？」

「こんなところ、誰もいるわけないよ。朝になつたら出て行けばいいだろ？」

僕が言つているのは、幽霊とかお化けとかそういうのがいかにも出そうだと言つてるんだ。でも、お化けが怖いなんて言えない。

「テレビだと、犯罪をした逃走犯とか、いつこいつに隠れてるよね？」

「そんなのがいたら、捕まえて賞金もらおうぜ」

ケイヤは自転車から降りると、歩いてレストランの裏に回る。さすがにドアの鍵はかかっている。

「翔！ ここから入れる」

ケイヤが先から手招きする。店の裏側にある窓が開いたようで、ケイヤの上半身はすでに半分中に入っている。僕がその窓の手前まで来たときには、ケイヤはレストランの中に入っていた。

「大丈夫かよ？」

「大丈夫だつて。早く来いよ」

ここで、躊躇することは男としての沽券にかかる。

僕は半分開いた窓から身体を忍び込ませる。

入ってきたところを見ると、埃の溜まつた床に、青白い影が窓枠の形に浮かんでいる。その奥までは月光は届かず、闇がひかえてい

る。ケイヤは部屋の奥まで探索にいっているみたいだ。姿が見えない。僕は不安に駆られ、「ケイヤ？」小さな声で呼びかける。

返事はない。

「ケイヤ！」

少し声を大きくするが、まだ返事がない。

目が慣れるごとに、店の中は意外に広い。部屋の隅に、円形のテーブルやスチールの椅子が積み上げられている。カウンターの向こうに大きな厨房がある。壊れた棚や、廃材が積み上げられているようだ、青白い闇の中に、不規則なシルエットが浮かんでいる。かび臭く濁んだ空気、湿気。汗が滲んでくる。くしゃみが出そうで、鼻がムズムズする。

「ケイヤ！！」

僕は手探りで奥に入つていいく。窓からの月光に照らされていない影の部分は、真の闇があり、いくら手を凝らしても何も見えない。

ガガツガン。足元にあつた空き缶を蹴つてしまたしく、静寂の中、けたたましい音が響く。僕は自分の出してしまった音に驚き、身をすくめる。そのとき、つしろに人影があった。

「ヒイツ

」

「奥まで行つてきたけど、暗くて何も見えないな

「ケイヤ、脅かすなよ」

「何そんなビビッてるんだよ」

「ビビッてなんかいないよ！」

「ビビッてるつて

」

「しーつ！ 今、向こうの方から、何か音がしなかつたか？」

カウンターの横から、通路が奥につながつていて。多分その奥に、レストランの個室とか、従業員用の部屋とかがあるんだろう。そつちのほうから、床を金属のようなもので擦つた音がした。

「音なんか聞こえなかつたぞ。やっぱりビビッてんだよ」

「しーつ！」

僕とケイヤは顔を見合させた。今度はケイヤにもハツキリ聞こえたはずだ。ドアがおもむろに開く音がした。

「隠れろ！」

僕らは積み上げたテーブルの下に潜り込んだ。

ドアが閉まり、足音が通路を近づいてくる。一步いっぽのリズムが違う。多分、どちらかの足を引きずっているんだ。怪我をするのかもしれない。足音はゆっくりと僕らのほうへ近づいてくる。僕らのいる部屋の中央に、人影が見えた。右手に何かを握っている。影はやはり足を引きずっている。光の届かない暗闇に隠れる僕らのことは見えないはずだけど、その影は迷いもせず、じちらへ近づいてくる。

影は目の前で止まった。右手のものを僕らのほうへ突き出す。突然のあまりの眩しさに、何が起きたのか分からなかつた。強い光に照らされ、目が眩む。右手に握られていたのは、懐中電灯だつた。光の向こうにいる人物の姿は眩しくて見ることができない。

「お前ら、こんなところで何しているんだ！」

低音の声が響く。僕は懐中電灯の光をさえぎるよつに手を前にかざしたまま、動けない。

懐中電灯の光りが僕らの顔から外され、やつと姿を見ることができた。

白髪交じりの長い髪。それに負けない長い髪。真夏だというのにマントを被り、まるで映画で観た、イギリスの魔法学校の校長のようだつた。

「ダ、ダンブルド……」

「こいつ、浮浪者だ」

ケイヤは僕にしか聞こえないくらいの声で言つ。確かによく見ると、髪の毛はボサボサだし、髭は伸び放題。マントと思つたのは汚い毛布だつた。そして、ちょっと臭い。

「家出でもしてきたか

浮浪者のおっちゃんは、威厳のある低い声で言つた。

僕らはいつでも飛びかかるれる体勢を取つてゐる。そのとき、僕のお腹が大きな音をたてた。腹が減ると、本当に力が入らないんだ。

「なんだ、お前ら腹減つてるのか？」

浮浪者は笑つた。前歯は一本しかなく、そのほかは抜け落ちている。歯と歯の間から、妙に赤みの強い舌が見える。

「いいもんがあるんだ。食わしてやろうか？」

お腹は減つたが、浮浪者に恵んでもらうつもりはない。だいたいどんなもの食べさせられるか分かつたもんじやない。

「いいからついてこい」

浮浪者は左足を引きずりながら、奥の部屋へ向かつていく。僕とケイヤはいつでも逃げ出せる体勢を取りながら、後についていった。脚が悪そだから、逃げようと思えば、いつでも逃げだせる。

通路に出ると、左右にドアがある。浮浪者は右のドアを開けて入つていく。場所としては、厨房の奥になる。十畳ほどの広さで、従業員の休憩所とかに使つていたのかもしれない。奥の半分くらいのスペースには畳が敷いてある。僕らが中に入ると、「ちょっと待つてな」と言い残し、浮浪者は一人部屋を出て行く。

懐中電灯の明かりがなくなると、部屋は闇に包まれる。

「やばいって」

僕はケイヤに向かつて言つた。ケイヤの顔は暗くてよく見えなかつたが、目だけが青く光つてゐる。ケイヤまでが悪魔の使いで、僕は大きな罠に嵌められているんだ、なんて妄想してたら、背中がブルつて震えた。

「なんかあつたら、あんな浮浪者一撃で倒してやるよ

ケイヤは口で言つほど、喧嘩が強くない。そして、僕はケイヤよりもっと喧嘩が弱い。おっちゃんは足は引きずつてゐるが、体格はけつこういい。身長だって、僕の父さんより大きいくらいだ。でも、二人がかりならどうにかなるかもしれない。

僕らは畳みの縁に座つていた。しばらくすると、通路から浮浪者

の足を引きずりながら歩く、足音が近づいてくる。その度に、通路を照らす懐中電灯の光が左右に揺れる。部屋の入口に浮浪者は立つた。

左手に紙袋を持ち、右手にはロープを握りしめている。
「しきり手にドアを勢いよく閉める。バタンと大きな音がして、ケイヤが驚いてビクリとする。

僕はケイヤと顔を見合せせる。窓はベニヤ板で覆われ、ドアは浮浪者の後ろだ。浮浪者を倒さなければ逃げられない。浮浪者はランタンを持っていて、それに灯を点す。部屋はオレンジ色の光に照られ、浮浪者の影が大きく揺れる。

「お前ら、服を脱げ！」

浮浪者は命ずるよつて言つた。

「いいから早く脱げ！ そんな濡れた服を着てたら、風邪引いちまうぞ」

浮浪者のおっちゃんはロープの端をカーテンレールにかけ、もう片方を壁に刺さった釘にかける。紙袋の中から洗濯ばさみを取り出し、僕に手渡す。

「脱いだら、これでロープに干しどけ」

僕とケイヤは、渋々着ていたTシャツと短パンを脱いで、ロープに洗濯ばさみで止める。デイパックの中身も濡れていたので、着替えにもつてきていった服も一緒に干す。白いブリーフ一枚しか身につけていないケイヤの痩せた身体が、オレンジ色の光に照らされている。

おっちゃんは、紙袋からカセックコーン口を取り出すと、鍋にペットボトルから水を入れ、沸かし始める。その中に、缶を入れる。

「お前ら、運がいいぞ。丁度これを仕入れてきたところだ。賞味期限は一週間過ぎてるけど、缶入りのものの賞味期限なんて有つてないよ」

鍋の中を見ると、入れられているのは缶入りのポタージュスープだった。それを湯煎で温めてくれているらしい。

「寒かったら、そこにある毛布にくるまつてていいぞ」

横を見ると、普段おっちゃんが使っているのだろう毛布が畳の上に置いてある。多分、洗つたことなどないのだろう。何ともいえない風格がある。とてもじゃないが、恐れ多くて触ることをえはばかられる。

「家出か？」

「つぶん、違う」

僕は引っ越しした友達のところへ向かっている」と。これまでの経緯をおっちゃんに話した。このおっちゃんは信用しても大丈夫なような気がしたからだ。

「そりゃまた、えらいシンディー」とじとるな

「ワンタンとカセットコンロの火に照らされて、鍋を覗き込んでいおっちゃんの姿は、やっぱり魔法使いにしか思えなかつた。

「おっちゃんはここに、一人で住んでるのか?」

ケイヤは田の前の鍋に話しかけるように言った。僕らは鍋の前に膝を抱えて座つてゐる。

「まあな

「寂しくない?」

「もう慣れたよ

笑うおっちゃんの口は、一本しかない前歯が光つてゐる。

「何でこんなところに住んでるんだ?」

「まあ、いろいろあつてな。ほれ、温まつたぞ、飲んでみい」

おっちゃんは鍋から直接手づかみで缶を取り出すると、僕とケイヤに手渡した。

それは手で持つことができないほど熱くなつていて、僕らは上に放り投げてはキャッチし、持つていられなくなつてまた上に放り投げる。手から伝わるその熱が気持ちよかつた。

賞味期限のことは少し気になつたが、もうそんなことはどうでもいいくらいお腹が減つていた。缶コーヒーみたいにプルトップを開けると、直接飲むことができる。

一口飲むと、その熱が、「ーンの芳ばしい香りが、舌の付け根に染み入るような甘みが、疲れきった僕の身体の中へ溶けていく。僕とケイヤは、うつとりとスープの缶を見つめた。

今まで食べた物の中で、一番美味しい。世の中にこんなに美味しいものが存在したなんて、奇跡だ。田の前にいるのは、本物の魔法使いなのかもしれない。

「怖くないの？」

僕は幸福な気分の中、おっちゃんに聞いた。

「ん？ 人は夢とか希望を持つているから恐れを感じるんだ。夢も希望もなくしてしまえば、ほとんどの恐怖はなくなるんだ」

僕はおっちゃんの言つていることの意味がよく分からなかつた。

多分、大人は多少のことでは怖くないのだろうと思つた。

魔法のスープが身体中にいきわたると、心地の良い眠気が襲つてきた。僕らはいつの間にか置みに横になり、眠つていだ。夜中に目を覚ますとランタンの灯は消され、おっちゃんは奥の毛布の中に包まつていた。

すぐ隣にケイヤが仰向けに寝てゐる。ケイヤの裸の肩と僕の肩が触れてゐる。そこからケイヤの温もりが伝わつてくる。ケイヤの呼吸する音が聞こえる。その音に合わせて、ケイヤの胸が上下に動いている。見てゐるだけでなんとなく心が温かくなる。もしかすると、こういうのが夢とか希望とかいうものかもしれない、ふと思つた。僕はケイヤといふことで恐怖を感じてゐるのだろうか。よく分からぬ。ただ、もしケイヤがどこか遠く、自転車なんかじやとても行けないような場所に行つてしまつて、一度と会えなくなることを考えると、なんだか怖いなと思つた。

次に目覚めたとき、窓を塞ぐベニヤ板の隙間から、透き通つた、境目のハツキリした光りが差し込んでいた。身体を起こしそうとするが関節が悲鳴を上げる。足と腰が自分のものでないようにも固まつていた。ケイヤはもう起きて、窓のそばに立つてゐる。おっちゃんの姿は見当たらなかつた。カセットコンロやランタンも片付けられてゐる。それらがあつた場所に、コーンスープの新しい缶が置かれてゐる。

ロープに吊るされたティーシャツを触ると、まだ少し湿つてゐた。気持ち悪かつたが、洗濯ばさみを外してそれを着る。ちょっと我慢

すればすぐに乾くだり。

「おっちゃんは？」

「俺が起きたときには、もういなかつた」
荷物を「ティパックに詰め、コーンスープを手にもつて部屋を出る。
レストランには窓の隙間から漏れるなんスジもの光が、重なり合つ
ように幾何学模様を作っている。

入ってきた窓から外に出ると、そこには光が満ちていた。眩しさ
に慣れるまで、しばらく目が開けられない。薄日を開けながら周り
を見回すが、おっちゃんの姿はなかつた。

自転車の脇で、冷たいままの「コーンスープを飲む。魔法が解けて
しまったのか、昨夜ほどの美味しさは感じられない。
おっちゃんが戻つてくる気配もなかつたので、埃まみれの窓ガラ
スいっぱいに、『ありがとう』と指で書いてから、自転車に乗つた。

山の斜面はまだ途中だたよつで、緩やかな下り坂がじばらく続く。自転車は快適にスピードを上げ、木陰に入れば、わずかに残つた朝の空気が僕らの髪をなびかせる。

道が平坦になると、日を遮る樹木は姿を消し、田園の光るような緑が目の前に広がる。雲はひとかけらもなく、突き抜けるような青空がどこまでも続いている。

建物の数が次第に増えてくる。最初にあつたコンビニで僕らはおにぎりと飲み物を買った。時間は九時を過ぎたところだ。

「よつちんに電話してみよつよ

よつちんに近づくとともに気持ちが高ぶつてくる。僕はコンビニの前のガードレールに寄りかかり、おにぎりの包みを剥がしながら言った。

「そつだな、近くまで来てるつて言つたら、よつちん驚くかな？」
ケイヤも興奮しているようだ。日焼けした真つ黒な顔に、目だけが輝いている。

「そりやあ、あつと驚くよ。ビックリしたよつちんの顔、直接見たかつたな」

ケイヤは携帯電話を取り出すと、よつちんの携帯にかける。すぐに眉間に皺をよせ、険しい顔をしながら携帯をたたむ。

「電源が入つてないか、電波の届かないところにいるつて

僕らは田を合わせ、同時にため息をつく。

「まあ、行くしかないか。早く喰つて出発しようぜ」

ケイヤは携帯をしまつと、おにぎりを頬張つた。

建物の間隔が狭まり、高いビルが目立ち始める。道は一車線にな

り、車の量が急に増えてくる。歩道も広く整備されていて、県庁舎の周辺はスースを着た人達の姿が目立つ。

さつきから何度も電話をしているが、通じない。時間はもう十時になると、ううとしていた。あと一時間もすればよつちんの家に着いてしまう。

道路は三車線に広がり、大きな駅の前には何軒ものデパートや百貨店が立ち並んでいる。アスファルトが真夏の太陽を照り返す。街路樹にとまつた蝉が、僕らの不安をあおるように鳴き続いている。

ケイヤが自分の携帯を畳みながら言つ。

「出かけてるつてことはないよな?」

「用事がないつて確認したの、おとといだからな」「まあな」

ケイヤは口をアヒルのようく突き出してしている。

「会えなかつたらどうじょう?」

僕が言つと、ケイヤは降りていた自転車にまたがる。「行つてみるしかないよ……」

ケイヤの後を僕は走つていて、やがて、高いビルはなくなり、住宅街に入つてくる。空き地が随所に見られ、畑や水田が目立ち始めた。

ケイヤは自転車を止めて、地図を広げる。

「多分、この辺のはずなんだけど……」

何度も、同じ道を行つたりきたりしている。

僕は地図を覗き込む。電柱に書かれた住所がここで、よつちんの家の住所がえーと、ここで、あー、ずーつと手前のところで右に曲がらなくちやいけなかつたんだ。

僕はケイヤの手から地図を奪い取ると、ケイヤの前に出て、自転車を漕ぎ始めた。

一軒家の前で、僕は自転車を止める。

「ここだ

グレーの外壁の一階建てで、テレビの「マークシヤル」に压してくるような洒落た造りだ。門から庭を覗くことができる、#が敷かれ、よく手入れされた花々が咲いている。

「立派な家だなあ」

ケイヤはそう言いながら携帯電話を取り出す。やはり、よっちゃんは出ない。

ケイヤは僕に、田でインター ホンを示す。そのボタンを押せといふことらしい。この家の中に、よっちゃんがいると思うと、胸が締め付けられる感じがする。出かけて会えないことを考えると、締め付けははもっと強くなつて、苦しいような痛みが走る。

ボタンを押そうと指を伸ばす。ケイヤを見るとゆっくつとうなずく。勇気を出してボタンを押す。家の中からインター ホンの音が聞こえる。僕の心臓の音が、ケイヤにも聞こえるくらい高鳴っている。遠くで車が走る音が聞こえる。相変わらず、蝉はどこかで鳴き続けている。額の汗が頬を伝い、首筋に流れしていく。家の中からは何も反応がない。

「いないのかなあ？」

頭の芯がシワシワしていく。息がしづらくなつて、吐き気がする。今度は、ケイヤがインター ホンのボタンを押す。また、家の中で『ピンポーン』と音がする。僕らはそのままの形で、玄関の前に突つ立つている。ときどき、ケイヤと田線が合つが、一人とも何も言いい出せない。ジリジリとした時間だけが流れる。

諦めかけたとき、玄関の扉が開いた。そりからよちんの妹さんが顔を出す。

「あら、あなた達？」

僕らは肩をすくめるようにお辞儀をする。そして、ケイヤが言つた。

「じんてちば。よっちゃんいますか?」

今、出かけてるんだけど…… もしかして、陽一にねぎねぎ会い

「何で、おまえ？」

しないんですか？

「電話したが、忙が一事であります。

「多分、図書館だと懸つかない、電源切つてあるのかなあ。」うつてみる

?

よつちんのお母さんは図書館の位置を教えてくれた。

ここから十分はかかるない。僕らはお礼を言うと、図書館へ向か

つ
た。

「よつかったなあ、図書館で。ハラハラしたよ。」
「まできて会え
なかつたら、悲惨だよ。でも、よつちん図書館なんかで何してんだ
？」
「読書つて柄でもないのに」

ケイヤと並んで走りながら、僕は安堵のため、少しお喋りになつていた。そのとき、急にケイヤが自転車を止める。

「どうした?」

「タイヤがパンクしたみたいなんだ」

見ると、後輪がペシャンコに潰れている。

「やつを通つたところに自転車屋があつたから、そこまで戻るか。

先に、図書館に行ってよ。直したらすぐ行くから

自転車屋があつたのはよつちんの家のだいぶ向こうだ。

「僕も一緒に戻るよ」

「いや、よつちん見つけるまでは気が気じゃないから、先に行って探しておいてよ」

「分かった。よつちん捕まえておく」

僕らはそこで別れた。よつちんのお母さんに教えてもらつた道は、それほど複雑ではなかつたけど、念のため、地図に図書館の位置をペンで書き込み、ケイヤに渡した。

まったく知らない場所を、一人で走るのは心細かつた。離れてみて初めて、ケイヤの存在を強く感じる。一人になつたとたんに世界は違つて見える。

言われたとおりに道を進むと、程なくして、図書館に着くことができた。白い一階建ての建物で、入口に書かれた図書館という銀色の文字が少しあげてる。自転車を置き、入口の前に立つ。よつちんが中に入るのは少しうつと、緊張する。自動ドアが開き中に入ると、冷房の冷たい空気と、図書館特有の紙とインクの匂いに包まれる。一階の窓際にテーブルが置かれ、読書コーナーになつていて、そこにはよつちんはいない。本棚の間を一周し、確認してから、二階の閲覧室に向かう。階段を上がつて左側の部屋だ。ガラスのドアがあり、そこから中を覗く。部屋の奥から一番目の席に、よつちんは一人で座つていた。僕のことにはまだ気付いていない。本に目を落としている。

よつちんだ。

なんか、すごくドキドキしてる。デートの待ち合わせって、こんな感じなのかもしれない。

僕はドアを開けて閲覧室の中へ入つていく。よつちんの机の横に

立つけど、僕に気が付かないみたいだ。

「よつちん」

言葉がかずれてしまつ。

よつちんは読んでいる本から顔を上げると僕のことを見た。目をパチクリさせながら、ただ僕のことをじっと見てゐるだけだ。反応がない。ポカーンとした時間が過ぎていく。

「しつ、翔くん！」

突然、我に返つたよつちんは素つ頓狂な大きな声を上げる。部屋にいた全員が、僕らのことを見る。

「何で！ 何で、翔くんがここにいるんだよ！ ！」

よつちんは部屋に響き渡るよつちんの大好きな大きな声で叫ぶ。

「分かつたわかつた。とりあえず、ここから出よつ

僕とよつちんは図書館を出ると、抱き合ひ、そして僕はよつちんの頬つぺたを摘まんでブニュブニュしながら、再開を祝つた。

「ケイヤも来てるんだ。自転車がパンクして、直したらすぐここに来るよ」

「まさか、自転車で来たの？」

「そうだよ

「うそ！」

「うそだろ。僕もケイヤが自転車で行こうつて言い出したときには、嘘だろつて、思つたよ」

「でも、どうして？」

「おととい、ケイヤのところにメールしただろ。それが気になつたのと、お前のこの頬つぺたをこいつやってブニュブニュしたかったからだよ」

僕はもう一度、さつきよりも少し力を込めて、よつちんの頬つぺたをブニュブニュした。

「『ぐん。ほひがへんにやミハールしひやつたから

よつちんは頬つぺたを引つ張られながら言つ。

「ただ、遊びに来ただけだから、気にしなくていいよ

「でも、大変だったでしょ？」

「うん。大変だつた
」

僕は目頭が熱くなつてきた。本当に大変だつたんだよ。本当に、本当に、本当に大変だつたんだよ！ ウウツ……。でも、よつちんにあえてよかつたあー。ウウウツ……。僕は涙を堪えながら、もう一度、よつちんを抱きしめ、頬つぺたをブニュブニュした。

「何があつたのか？」
「うん……別に大したことじゃないんだけどね」
「言ってみなよ」
「うん……」
「学校でいじめられてるんじゃないかつて、ケイヤが心配してたぞ」
「そんなことないよ。みんないい人だよ」
「ふーん。ならいいけど……」

僕らは図書館の自転車置き場の近くにあつたベンチに座った。横に大きなケヤキが植えられていて、日陰になつていて。風の通り道のようで、木漏れ日が涼しくゆれる。

「……」

早くケイヤが戻つてこないかなと思つたが、あの距離を引き返したのだから、もつじばらく時間がかかるだろう。

「……」
「……じつはわあ
「……ん？」
「新しい父さんの方にも、僕と同じ年の子供がいるんだ
「そいつにいじめられるのか？」
「いじめられてるわけじゃないんだけど、時どき、ぶたれたりする。多分、僕が余計なこと言つたり、グズグズしてるからいけないんだと思うんだけど……」
「どんなことがあつたって暴力振るうことないだろう!」
「このごろは、一緒にいるだけでこの辺りがモヤモヤして、すぐ疲れなんだ」
よつちんは胃の辺りを押さえて、げつそりした顔で言つ。そういう

えば、少し痩せたかもしれない。

「それは絶対ストレスだよ」

「母さん、今日は家にいるけど、普段は工場で働いてるんだ。夏休みになつて、家にいるのは僕と一人だけになる。毎日一緒に過ごすのかと思うだけで、苦しくなつてへる。今日も朝から、図書館に行くつて、逃げてきたんだ」

「それつて、けつこう重症だなあ。お母さんに言つた?」

「ううん。心配かけたくないし、多分、信じてもられない」

「今から呼び出して、三人でやつつけちゃうか?」

「そういうわけにもいかないよ。家に帰つてから、絶対に言いつけられるし、もしかしたら復讐されるかもしれない……」

よつちんは寂しそうに微笑む。ケイヤなら何ていうんだろう? 僕がよつちんにしてあげられる「ことつて何かあるのか? 僕は何のためにここまできたんだ。もっと気の利いたことを言わなくちゃいけない。せめて、よつちんを明るい気分にさせたり、励ましたり、勇気付けたりできるようなことを」。

僕は何も言つことができなかつた。考えた末に出た言葉が、

「困つたな……」

本当にバカみたいだ。

「ケイヤに電話してみよう」

僕が言つと、よつちんはカバンから携帯を取り出し、電話をかけた。

よつちんはしばらくケイヤと懐かしそうに話していたが、急にしかめつ面になつて、何か一生懸命に考えながら話をしている。電話を切つてから僕に言つた。

「ケイヤ君、迷子になつてるみたい。分かりやすい場所を言つておいたから、ぼく達もそこまで移動しなくちゃ やれやれ。」

自転車を出してきて、僕らは図書館を出発した。よっちゃんはママチャリに乗っている。

僕はよっちゃんの後について走っていく。僕が来るときに通り過ぎた道をしばらく戻って、太い道路との交差点で右に曲がった。正面には大きな山脈がかすんで見える。本当に遠くのほうへ来たんだなと、実感する。道の両側には、パチンコ屋やファミリーレストラン、車が何台も並べられた中古車販売店が目立つ。道から離れると、建物よりも畑や田んぼのほうが占める割合が多い。

交差点でよっちゃんが止まった。

「ここで待ち合わせたんだ。ケイヤ君のいたところからだと、ここまで一本道だから、間違わないでこれるといいんだけどな」

「あいつの方向音痴は、予想以上だけどな」

自動販売機で冷たいお茶を買って、信号の手前のガードレールに寄りかかりながら飲んだ。メインの街道らしく交通量は多く、部分的に渋滞している箇所がある。信号で停まった車の中はエアコンが効いて涼しそうだ。

「あれ、ケイヤ君じゃない？」

僕らの来たのと反対側から、豆粒くらいの大きさで、自転車が近づいてくるのが見える。

「ああ、あの汚い格好はケイヤだ」

もちろん、僕もケイヤと同じくらい汚い。

迎えに行こうと立ち上がったとき、信号待ちをしている白いワゴンの助手席に乗っている女の人と目が合つた。なんとなく、訴えかけるような目で僕のことを見ている。そして

『た・す・け・て』と口が動いたように見えた。

「え？」

僕はその人をもう一度見る。

再び、唇が『た・す・け・て』と動いた。窓がしまっているので、声は聞こえない。実際には、声は出していいみたいだ。

よつちんの肩をたたき、車に乗った女の人のことを目で示す。よつちんが何事かと車の助手席を見ると、また、女の人の唇が『た・す・け・て』と動いた。

間違いない。僕らに助けを求めている。女の人の右腕には、手錠のようなものが巻かれている。運転席を覗き込む。ゴツイ体格のスボーツ刈りの男がハンドルを握っている。

どこかで見たような顔だ。誰かに似ている。

ゴリ田だ！

女人、手錠、『ゴリ田……

おとといケイヤの家で見たニュースを思い出す。

郵便局に入った強盗だ

信号は青になり、車はノロノロと走り出す。
僕とよっちゃんは車を追いかけるように、自転車をスタートさせた。
「郵便局に強盗が入ったの知ってるか？」
僕はよっちゃんに聞いた。

「そういえば、人質とつて逃走中だつて、テレビでやつてたかも」
「あの車に乗つてゐるの、絶対、人質と犯人だ」
「本当に？」

「ああ。犯人の顔、『ゴリ田に似てたから、間違いないつて！』
「どうしよう」

「……とつあえず、見失わないよつこしなくちや。僕はついていく
から、よっちゃんは警察に電話してくれ」

「分かつた」

よっちゃんは自転車を止めると、電話を取り出した。

僕は車のあとをついていく。前からケイヤがやつてへる。僕が迎
えに來たと思って、のん気に手を振つてゐる。
僕はケイヤに目もくれず、すれ違ひざまに「ついてきて」と言つ
と、追跡を続けた。

ケイヤはヒターンして僕に追いついてくる。

「なんだよ！」

「あの前の白い車、郵便局に入った強盗が乗つてゐるんだ」

「嘘だろ？」

僕は今見てきたことをケイヤに話した。

車は先に行つてしまつが、信号で停まつてゐる間に僕らが追いつ
く。僕らが追いつくころに信号は青に変わり、並んだ車列がノロノ
ロと動き始める。それを繰り返してゐる。

突然、白いワゴン車は急発進し左の狭い道を曲がる。もしかすると気付かれたのかもしれない。加速し、細い道を進んでいく。僕らも必死に追いかけるが、車との距離はあつといつ間に開いていく。道の両脇には家はなくなり、畑の中の一本道になる。視界は一気に広がり、遠くに見える小高い山の麓までは、見渡す限り畑が広がっている。

道の中央を耕うん機がのんびりとしたスピードで走っている。車はそれが邪魔で先にいけないようだ。クラクションを鳴らし、うしろから追い立てる。耕うん機は道の端によけようとするが、動きが緩慢で時間がかかる。けたたましくクラクションが鳴らされる。

その間に、僕と白いワゴン車との距離は近づいてくる。やはり、ケイヤのほうが漕ぐのがが速い。僕のはるか前を走っている。追いついてしまったらどうするんだ？ 興奮した頭の中で、もう一人の自分が警鐘を鳴らす。

耕うん機が左によけて、ワゴン車がそれをよけるのと同時に、ケイヤの自転車は耕うん機のさらに左、土がむき出しの部分を砂埃をあげて駆け抜け、車の前に出る。ケイヤは自転車で車を止めようとしているんだ。車の前で、ジグザクに走つて前に行かせないようにしている。車はクラクションを鳴らし続ける。そして、痺れを切らす。

ワゴン車は急加速し、ケイヤの姿が、僕の視界から消える。

「ケイヤ！」

車はそのまま走り去っていく。

「ケイヤ！ 大丈夫か？ ケイヤ！…」

追いつくと、自転車ごと、道路より一段下の畑の中にケイヤが倒れています。

「大丈夫か？」

「あのヤロー！ いきなり迫つてくるから、畑の中に落ちちゃった

よ

「怪我はない？」

「ああ、ここのくらい平氣だよ」

よつちんが遙かうしろから追いかけてくるのが見える。

「一人で上れるか？」

「大丈夫だ」

警察への連絡が取れたか気になつたので、よつちんの元まで戻つた。

よつちんは真つ赤な顔をして、自転車で走つてくる。

「警察は？」

「今こっちへ向かつてる」

白いワゴン車は、この道を山の麓の方まで走り去つてゐる。微かに白い車が動いているのが分かる。

犯人を逃がしてしまつた。失望と悔しさと安堵の気持ちが入り混じつてゐる。しかし、あの女の人は連れ去られてしまつた。口元のイメージが圧倒的で、どんな顔をしていたのかよく覚えていない。『た・す・け・て』と動く唇が、僕に助けを求めるその動きだけが、脳裏に焼きついてゐる。いつだつて、僕は何もできないよつちんの声で我に返る。

「この道を真直ぐ行くと、一股の道にぶつかるんだ。右に曲がれば山の中へ入つていく。もし、山の中へ入つていつたら、一本道だからこつち側から追いかけるのと、警察が山の向こうで待ち伏せすれば、もう逃げられない。そして、もし、左の道を選んだとしたら、あの道に戻つてくる」

よつちんは畑をはさんだ三百メートルほど向こう側を走る道を指差した。

まだ、終わつていない。まだ、あきらめちゃいけないんだ。まだ、希望はあるんだ。

「分かつた。そのこともう一度警察に連絡して、よつちんは後から来て」

よつちんのママチャリではこの畑を越えるのは無理だらう。僕は

よつちんを残し、ケイヤの元に戻った。

ケイヤは自転車を道路に上げようとしているところだった。

「ケイヤ！ あっちの道だ！」

僕は指差し、道路から畠にジャンプした。ケイヤも後からついてくる。僕らは最近、空き地で、マウンテンバイクに乗ってジャンプの練習をしていた。練習がこんなところで役に立つなんて考えもしなかつた。横を走るケイヤに、向こうの道に犯人が現れるかもしれないことを伝えた。

畠の中を突っ切つていく。何個かキャベツを潰してしまったけど、緊急事態だからしようがない。砂埃が舞い上がる。段差はジャンプで超える。

正面に、僕らより背の高いトウモロコシの畠が壁のように立ちはだかっていた。人一人がやっと通れるくらいの農作業用の道がある。僕とケイヤはそこを全速力で走り抜ける。ハンドルに当たつて、何本かのトウモロコシをなぎ倒してしまつ。ナスの苗木を、支柱ごと引き抜きながら突き進む。土が盛られた一メートルくらいの隆起があつた。それをジャンプで乗り越えようとする。思ったよりもスピードが出ている。空中に飛んだ瞬間に恐怖に包まれる。ケイヤは上手く着地して走り抜けていった。僕は前のめりの姿勢で地面に突っ込む。思わずブレーキを握ってしまう。前輪がロックし、そのまま自転車は一回転する。背中を強く地面に打ち付けるが、耕された土の上なので、強いダメージは受けていない。ケイヤは僕のことを振り返りながら走り続けている。僕もすぐに立ち上がると、放り出され、タイヤだけが回転している自転車を起こして、再び走り始める。

畠を抜けて、道路上ると、見渡す限り道路上に車はない。息切れした呼吸を整える。

心地よい風が、全身の汗を乾かすように吹いている。その風が、

道路わきに生えている雑草を揺らし、サワサワと音をたてている。小鳥のさえずりが聞こえる。ショウマイみたいな丸い雲が、早いスピードで幾つも流れしていく。広大な田園地帯に雲の影が水玉模様をつくり、同じスピードで進んでいく。なんかお腹が減った。

「大丈夫か？」

「全然、平気」

転んで泥だらけになつたTシャツを叩きながら僕は答える。

「よつちんどうだつた？」

「再婚相手にもよつちんと同じ年の子供がいたんだつて。そいつがスゲー嫌な奴らしいんだ。よつちんのこと殴つたりするんだつて」

「何だつて！ そんな奴、ボコボコにしてやろつぜー！」

「よつちんはそいつと、これからも一緒に暮らさなきやいけないんだ。一回やつつければ済むつて話じゃないだろ？」

「一回でダメなら、何回だつてやつてやる」

「だから、そういう話じや」

「おい。見ろ！」

向こうのほうから白いワゴン車がこちらに近づいてくる。本当にこっちに戻ってきたみたいだ。ケイヤの表情が険しくなる。車の姿は次第に大きくなつてくる。他の車はいない。

どうしたらいいのか分からぬ。僕らは無言のまま、近づいてくる車を見つめていた。

ケイヤは自転車にまたがつたまま、道路を封鎖するように立ちはだかる。この道路は一車線なので、ケイヤだけでは完全に道は塞げない。

「マジかよ。

僕もケイヤと一緒に並んで道路を塞いだ。

白いワゴン車の姿は大きくなつていく。向こうは強盗の犯人なんだぞ。こんなで止まるかよ！ でも、僕だけ逃げ出すわけにはい

かない。車はスピードを緩めずに近づいてくる。ケイヤのことを見る。ケイヤはじっと車を見据えたまま動かない。ケイヤを置いて逃げるわけにいかない。一人で逃げ出すくらいなら、このまま死んだほうがいい。僕は目をつぶった。

ずいぶん長い間、目をつぶっていたような気がする。もう車は来ないのか？思つた瞬間、ものすごい衝突音がした。同時に、握っていた自転車のハンドルに衝撃がはしり、僕は自転車ごと、よろよろと倒れる。僕の自転車の前輪に車は接触したみたいだ。目を開けると、ケイヤが車のボンネットの上を飛んでいる。飛んでいるケイヤの形が、影絵みたいに青空をくり抜く。金属が擦れあい、潰れる大きな音がする。倒れた僕の前を無数のオレンジ色の火花が移動していく。ケイヤの自転車が車の下に入り込んで火花を上げているんだ。去年、僕とケイヤとよっちゃんで花火をしたことを思い出す。また三人で花火をすることなんてあるんだろうか……

ドスンという鈍い音がした。ケイヤが地面に転がっている。

車は、火花を上げながら蛇行して走り、ハンドルを取られたのか煙の中に落ちた。土埃が舞い上がる。突然、静寂が訪れる。さつきと何も変わっていないよう、風がサワサワと道路わきの草を揺らす。遠くのほうで、蝉が鳴いている。僕の頬の下にあるアスファルトが、日に照らされ、焼けるよに熱い。熱いけど、なんか気持ちいい。このまま眠つてしまいたい。

運転席のドアが開いて、中から犯人が出でてくる。ふらつきながら、道路に上つてくる。僕が立ち上がりうとすると、ケイヤが僕よりも早く立ち上がり、犯人に向かつて走り出す。

「ケイヤ！」

僕は叫びながら、ケイヤの後を追いかける。

「無理するな！」

ケイヤは犯人に追いつくと一瞬の躊躇いもみせずに飛びかかった。犯人はケイヤを振りほどこうと左右に身体を動かすが、ケイヤはしがみついたまま放れない。犯人はズボンのポケットから何かを取り

出す。右手に持つたそれが銀色に輝いている。ナイフだ！ もつと早く走りたいのに、手足の動きがスローモーションみたいになつて歯痒い。犯人は右手を振り上げ、今にもケイヤを突き刺そうとしている。僕はギリギリのところで、ナイフを持った右手にしがみついた。犯人は「ゴリ田なんかより断然、デカイ。身長が百八センチ以上ある。腕の筋肉もすごく太くて、僕一人じゃとても押さえきれない。だけど、絶対にこの手を放しちゃいけないんだ！ どんなことがあつたって！ 僕は腕に噛みつく。犯人は信じられないような力で僕を引き離そうとする。無理だよ！ いくらなんでも、こんなのが無理だ！ ふと、犯人の肩越しにうしろを見ると、よつちんが自転車でこちらに向かつてくる。犯人はよつちんには気付いていない。よつちんは真つ赤な顔をして、ママチャリで突進してくる。

よつちんはそのまま、犯人の背中に激突した。犯人はマントヒビの雄叫びみたいな声を上げて、道路に倒れた。すかさずよつちんが犯人の胸の上に馬乗りになり、僕が右手、ケイヤが左手の上に乗つて、押さえ込んだ。

さすがに三人に押さえられては動けないらしく、犯人はしばらく騒いでいたけど、そのうち大人しくなつた。

遠くのほうからパトカーのサイレンが近づいてきた。

パトカーが何台もやってきて、たくさんのお巡りさんに囲まれた。犯人は手錠をかけられて、その中の一台に乗せられ、連れていかれ。犯人の乗つていたワゴン車の中から、人質になつていた女人も救出された。救急車が来て、女人は救急隊員に抱えられながら乗つた。ケイヤは自分では大丈夫だと言つたけど、あれだけ激しく車とぶつかったのだから、念のために一緒に病院へ行くことになつた。

「じゃあ、また後でな」とケイヤは言つと、微笑み、手を振りながら救急車に自分で乗り込んだ。顔色が悪い気がしたけど、こんな

」との後だから仕方がないと思つた。

僕とよっちゃんは一人でパートカーに乗つて警察署に連れて行かれる。同じような質問に、何度もなんども答えさせられてうんざりした。夕方近くなつて、ケイヤの爺ちゃんを車に乗せて、僕の両親がやつてきた。嘘についてこんなところまで来てしまつたので、絶対に怒られると覚悟してたけど、意外にもそんなに怒られずに済んでホッとした。母さんは僕を抱きしめると涙を流した。母さんに抱きしめられることなんて、何年もなかつたので、恥ずかしくて、居心地が悪くて、ぐすぐつたくて、本当に困つた。

よっちゃんの家族も迎えに来ている。よっちゃんの新しいお父さんは、優しそうな人で安心した。驚いたことに、お父さんの連れ子という奴も警察の待合室に来ていた。本当に驚いた。そいつは勝気そうな目をしていて、鼻筋が通つていて、唇が生意氣そうで、髪の毛が長くて、女の子だつた。僕らの学校で一番可愛いと言われている、長瀬魅月よりも三倍くらい可愛かった。よっちゃんが出て行くと、よっちゃんの頭をポカんと平手で殴つて、心配かけるなつて、少し涙ぐんでいる。なんとなくだけど、今回のようにのよっちゃんの悩みについて、僕はもう、そんなに心配しなくてもいいのかなつて気がした。

ケイヤが病院から戻つてきた。みんなに囲まれて、少し恥ずかしそうに笑つている。爺ちゃんがケイヤの顔をなで回していた。ケイヤは爺ちゃんのされるがままになつてじつと動かずに笑つてゐる。

ケイヤは調べがあるから、まだ帰れないみたいだ。ケイヤのお父さんもこちらに向かつていて、夜には着くらしい。ケイヤの爺ちゃんを残して、僕らは先に帰ることになつた。

よっちゃんんとケイヤの顔を見ていたら、急に涙が溢れ出てきた。どんなに離れていたつて、住む世界が違つたつて、俺たちが友達だつてここには変わりないんだ、つて、ケイヤが言つていたのを思い出す。そうだ、どんなことがあつたつて、僕らの友情は変わらない。

よつちゃんも大粒の涙を流している。多分、これから僕らはたくさん
の苦しいことや、恐ろしいこと、辛いことに出くわすんだと思つ。
怖いのはしようがない。でも、逃げちゃいけないんだ。勇気を出し
て一步を踏み出せば、きっとその先に何かが見えてくる。それは夢
とか希望とかいわれるものなのかもしれないし、あるいは全く違つ
たものかもしれない。よく分からぬけど、僕らは一步いっぽ進ん
でいくしかないんだと思つた。

僕とよつちゃんはケイヤを残して部屋を出る。よつさんが手を振る
と、ケイヤは恥ずかしそうに笑つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4170n/>

僕らの冒険をめぐる物語

2010年10月8日12時23分発行